

FIELD NOTE

特別号

都留文科大学 地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門 機関誌
[フィールド・ノート 特別号] / 2012 / Jul.

特集

今日も明日も
つる日和



『フィールド・ノート』では

『都留の自然と人との交流』をテーマに

地域の自然・人・文化に関する情報を記録し

発信しています。

裏表紙のロゴの絵はアメリカのナチュラリスト、

ヘンリー・D・ソローの著書『ウォールデン 森の生活』の初版本扉に

ソローの妹ソフィアが描いたものです。

ロゴにそえられている「Grow Wild」はソローの言葉で、

その思想をわたしたちも大切にしたいとの想いを込めました。



特集

今日も明日も
つる日和

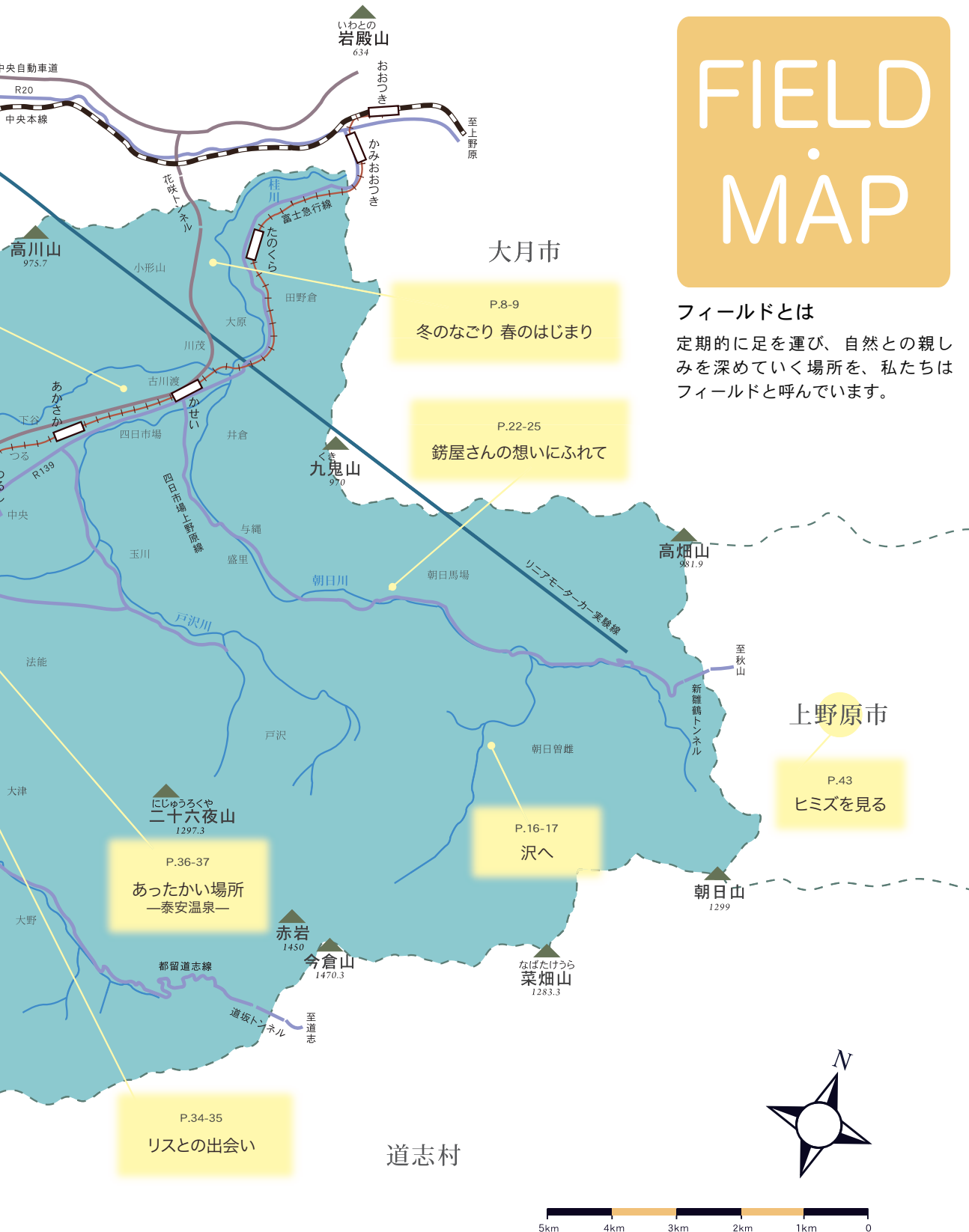
CONTENTS

- | | |
|----|---------------------------|
| 4 | フィールド・マップ |
| 6 | ようこそ！ |
| 8 | 冬のなごり 春のはじまり |
| 10 | わたしが山のカタチを気にしてしまうのは…… |
| 12 | ひろいもの 第4回 鹿の角 |
| 14 | 味と技の裏には |
| 16 | 沢へ |
| 18 | 初夏の公園 く木陰をさがす |
| 20 | 大学周辺の山々の記憶 |
| 22 | 鋳屋さんの想いにふれて |
| 26 | こちら、つる探偵局④
「うなぎさんの供養塔」 |
-
- | | |
|----|--|
| 28 | 都留市の旧5町村を巡る(1) 旧東桂村
梅がつなぐ過去・未来 |
| 30 | フィールド・ミュージアムのたのしみ
その事象に立ち会うということ
私たちの夢にかさなるリスと一本のクルミ |
| 34 | 森歩きの野帳から 第3回
リスとの出会い |
| 36 | あったかい場所 — 泰安温泉 — |
| 38 | 自分をみつめる 香りのアトリエ「紗泡」 |
| 40 | 先生を訪ねる 第2回
自然塾の番長 |
| 43 | ヒミズを見る |
| 44 | フィールド暦
センサーカメラが写した動物たち |

FIELD MAP

フィールドとは

定期的に足を運び、自然との親しみを深めていく場所を、私たちはフィールドと呼んでいます。







ようこそ！都留文科大学へ。

ここに来る途中、なにが見つけた？

とりたてて何もなかったらと思うたかもしれない。
でも、そんなことはないんだ。

じつはたくさん、いろんなものがあるんだよ。

4年間住むことになるかもしれない場所。

どんなところ？どんな人が住んでいる？

どんな体験ができる……？

ここに載っているのは、

一足先に都留で生活している先輩たちの都留での体験。

私たちが会って、見てきたもの。

来年の4月からはじまる生活が

「今日も明日もつる日和」になることを願って。

私たちの「つる日和」をお届けします。



冬のなごり 春のはじまり



雪

吊りは、気づいたらなくなっている。ばつと雨傘のように広がり、冬の寒

空を彩った雪吊りは、毎年いつとも知らぬ間になくなっていった――

庭木が武装しているようにも見える、雪吊り。じつさい、冬に備えた装いだ。冬寒く雪の積もるところで、アカマツなど、庭木を守るために取りつけられる。庭木の周りを覆った縄が、枝に雪を積もりにくくし、積もったとしても折れにくいように支えているのだ。雪吊りに使う材料はわらやシュロ、タケなど、ほとんどが植物。樹高にあった長さの柱を木全体の中央に立て、そこから下げたわら縄で枝を支える。

近ごろでは積雪地域でも取りつけるところが減っているいっぽう、雪が降りそうになくても、冬の風物詩だからと毎年庭に取りつけるところもある。

雪吊りの個性はてつぺんに一番よくあらわれている。「飾り結び」と呼んでわら縄をクルクルと巻きつけるところもあるけれど、都留や大月ではわらでつくった笠、「わらボツチ」をつける。仕上げにくくりつけた黒のシュ



左右の写真：4月14日、大月市初狩にて撮影。5月のはじめに取りはずしていた。平井造園(*)では4月のはじめに取りはずすそうだが、山間部のこの地域では遅い時季の雪に備えているようだ。てっぺんの飾りが「わらボッチ」

口縄は、雪吊りの頭をきわ立たせる決め手だ。背の高い雪吊りが頭にかぶった小さな笠。どこかお祭り道具に見えておもしろい。

晩秋、都留だと11月の終わりごろに現れる、雪吊り。庭木を覆う飾りは、冬を知らせる。寒さに備えているんだな。これから、もっと寒くなるんだな。わらで厚着をした庭木を見て思わず身震いする。

冬を越した雪吊りは春先にバラバラになって、庭木は自由になった枝をのびのびと伸ばす。ちょうど、暖かくなって冬の寒さを忘れていくように、雪吊りはそつと身をひそめて春を知らせるのだ。

現れるときは冬を告げ、なくなるときは春を知らせる。姿を見なくなつてから一ヶ月が過ぎた。わらの飾りとはしばらくお別れだ。

聞いた話では、雪吊りのてっぺんにわらでつくった鶴を乗せる人もいたという。どんなふうに取りつけられるのだろう。どんな鶴なのだろう。いつか見られる日が来るだろうか。まだまだ遠い冬。冬に上を向くのが今からたのしみになってきた。

石川あすか（社会学科4年） 文・写真

*都留市田野倉にある平井造園のかたにお話をうかがいました。ご協力ありがとうございます

高川山

小金沢連嶺

滝子山

▲ わたしが

山のカタチを

気にしてしまうのは……

大学と家の往復の合間に、学内を移動するときに、ついつい目を向けてしまうのは山の稜線。日常のなかで、山を見るということはどういうことか、考えてみた。

都留に暮らし始めたのと同じころから、山歩きをはじめた。どちらも今年でちょうど6年目になる。

都留から水平線や地平線は見えないけれど、稜線が見える。山と空の境の線、稜線を眺めるのが私は好きだ。

たとえば朝、洗濯物を干すときは二十六夜山が、家を出るといちばんに三ツ峠が目飛び込んでくる。住まいのある十日市場から大学へ向かうために国道に出ると、今度は天狗山。そのうしろに尾崎山の稜線、文台山。また二十六夜山が見えて、振り返ると三ツ峠。大学に着いて研究室のある2号館の5階の窓辺に立つと、三ツ峠から東へ続く本社ヶ丸、鶴ヶ鳥屋山の稜線。山並みはいつたん途切れ高川山……。という具合にさまざまな稜線が目に入ってきてしまう。

日常で目に入る稜線のほとんどを歩いた。稜線の地形を地図でも確認し、じつさいに山を歩く。稜線を歩きながら、いつも見ているもののさまざまな

見え方を探るのもおもしろい。そうするうちに見る対象への愛着はどんどん深くなる。

山を見る、歩く、地図で歩いたところを確認、見る、歩く。私はただ、5年のあいだにそれを繰り返してきただけなのだ。

慣れ親しんでいる稜線のひとつに、大学を囲む尾崎山から文台山へと続く尾根がある。今年の5月の連休、久しぶりにここを歩くことになった。ここは道が不明瞭だから、木々が葉を落とした時期に地形図を片手に、歩くことがほとんど。歩く回数を重ねて余裕が出てきたのと、ちょうど芽吹ききの時期だったので、今回は足元をよく見ながら歩いた。トリカブトとヤブレガサの葉、イカリソウやヒトリシズカの咲いているのを見つけた。9月になったら、トリカブトは花を咲かせ、道は紫色に染まるのだろう。イカリソウは数年前に八ヶ岳で見かけたことがあったなあと、都留から離れた場所にも咲いてい



▶ 右の稜線は都留文科大学2号館5階から見える景色を描いたもの

どうじ山

三ツ峠

本社ヶ丸

鶴ヶ島屋山



▲尾崎山から文台山に向かって歩き、北東の方角を眺めるとこんなふうに稜線が見える。山を歩くと、日常とは違った視点を与えてくれるのがたのしい

▲左上から時計回りに、スマレ、イカリソウ、ヒトリシズカ、フキ

た花のことを思う。

山歩きに興味をもち始めたのは都留に来てからなので、都留でやるような「山の見方」は実家のある長野ではなかなかできない。とはいえ、この5年のあいだに実家から見える山にも登るようになって、わかる山はすこしずつ増えてはきている。実家の2階の物干場から、北八ヶ岳の蓼科山・北アルプスの槍ヶ岳や穂高連峰が見える。どれも歩いたことがあるからわかるのであり、それらの山と自分との位置関係を何度も地図で見えてきたからわかるのだ。まだ実家から見える稜線すべては歩いておらず、その稜線すべてをわかるようになっていない。それが悔しくて、まだ名前のわからない稜線を歩きたいと思う。山の姿とその名を一致させるために。

電車や車での移動のときにも、これまで歩いたことのある稜線が見えは

しないかと探してしまうのは私のクセだ。寝ない限り、移動する時間のほとんどを外を眺めて過ごす。歩いたことのない稜線でも、山のつながり具合、ぎざぎざと続く険しそうな鋭角の連続を見れば、かつこいと思ひ、つい「歩きたい」と口走っている。

日常に存在しているもののなかで、わかるものが増えていくと、日々のたのしみがまたひとつ、またひとつと増えていく。その経験を毎日繰り返していくと、私はどんなものに興味を持ち、どんなふうに変化していくだろう。この先、暮らす場所ではどんな山が見えるかな。たのしみは尽きることがない。

今、都留で「山座同定図」をつくれないかなあと考えている。都留のどのポイントから山並みを見たら、いちばん都留らしい山座同定図がつけられるか？ これは今年、私の都留での宿題になりそうだ。

桜井明子（文学研究科2年） 文・写真
富塚恵介（本学卒業生） 写真

今

度は角をひろい
たい、と思ったのは、

前回、鳥の巣を見つけようとして、
見つけられたのがきっかけだ。もし
かしたら角だつて、見つけようとして
みれば見つかるかもしれない。そう思
うと、角はひろつてみたいものになった。

鹿へ近づく

鹿の角は毎年生え変わる。それも春先が多
いらしい。「角を見つけない」ということを
話すと、いろいろな人が鹿にまつわつて自身
の知っていることを教えてくれた。

鹿が沢へ降りてきて水を飲むうとしてかが
んだときに、角がぼろりと落ちること。鹿の
年齢によつて角の形や大きさはさまざまで、
なかでも「四尖^{よんせん}」や「五尖^{ごせん}」と呼ばれる、先
が4つ5つに枝分かれしているものとはくに
立派なのだという。五尖の角を持つ黒い
毛並みをしたエゾジカの格好良さ。あるいは
道志の川にいれば鹿の首ごと見つかるかもし
れないこと、角は加工すると臭いこと……。

ひろいもの

4. 鹿の角

鹿の角をひろえたら、宝物だ。
角を探してこの春山を歩いた。

香西恵（社会学科4年）＝文・写真

山へ通うこと

大学の職員のかたや守衛さん。身近な人の
口から鹿にまつわる話がでてくるたびに、角
への執着を新たにするとともに、鹿の話題が
広がることに驚いていた。わたしは「角をひ
ろう」ということをおして鹿に近づくこと
になったけれど、周りの人に話を聞いてみれ
ば、ごく自然に鹿の話がでてくる。どんなさ
さいなことでも鹿について語ることが、どの
人にもあった。

に山を歩く。

ほかのひろ

いものとは違つて珍しいうえに、誰

かが先に見つけたらひろわれてしまうだろ
うから、本当に見つけようとするならにか

く足繁く通うしかない。角が見つかったらも
ちろん嬉しいけれど、そのために通うことで、

山が変わつていく様子を間近に見ることがで
き、知っているようで知らないものとの出会

いをしていねいに重ねることができたのが、大

「角を見
つける」
という
目的
のもと

きな収穫だったかもしれない。

4月18日には蝟たきのような形をしたキノコが落ちていたのを見つけた（帰って図鑑で確認してツチグリだと分かる）。「ホタルカズラ」の花もそう。この時期、「ホタルカズラ」という青い花が咲くことは知っていたが、ほんものを見たのは気づけば初めてだった。

写真で見たことのある生きものを、じつさに野山で見つける。ホタルカズラの花が、まわりの勢いを増した草のなかでどのくらい小さくて、青や紫の花色がどんなふうに見えるのか。胞子を飛ばしたあとのツチグリが道にどんなふうにながっているのか、乾燥したら「蝟」の足がどのように変化するのか。じつさいに見なければ、本当にそれを知っていることにはならないのだと、今更ながら気がつくことになった。

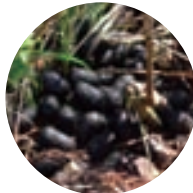
角にたどり着く

しばらく山歩きに行かずにいた5月下旬、思いがけないところで角を手に入れることになった。5月23日、編集部員の取材に同行して、古渡地区の梅農家のかたに梅畑を案内していただいた折のこと。鹿にサザンカの本の葉が食べられてしまう、というお話を聞

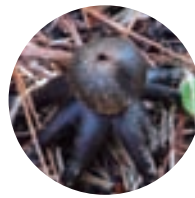
シカの食べあと



シカのフン



ツチグリ



ホタルカズラの花

〈ひろいもの記録〉実施日：3月19日、4月13日、4月18日、4月20日、4月24日、5月4日、5月28日、5月31日／場所：おもに「都留自然遊歩道」を歩いた。第1回、第5回は中屋敷フィールドへ／右頁写真：いただいた角。枝分かれの数で持ち主の年齢が分かるらしい。4つに分かれているので4歳か。草刈り機で切ってしまった跡がある。表面は白と茶で、細かな凹凸がある。すべらかで、ずっしりと重いのが嬉しい。

いたので、鹿の角を集めていることを話したのだ。すると、たしかこのあたりにあった、と言われて探してみると、畑の一角、桐の木の根元に、角があった。ついこのあいだ草刈りをして、硬いものが当たったと思ったら、角だったという。あれよあれよと、角をいただいってしまった。

まさかこのような形で角にたどり着くとは。念願の角が手に入った（それも、この春取れたばかりの新しいもの）信じられないよろこびと、いつぼうで「自分で見つけた」とはいえない口惜しさがあった。

角探しは角にたどり着いたことで、一応区切りを迎えた。けれどやっぱり、本当の願いは自分で見つけることだ。生い茂った草のなかで、どんなふうに角が隠れているのか、露にぬれているだろうか。きつと自分で見つけなければ知ることができないことがある。取材に行くとび足をのばすたび、知らないことが広がっていく。

都留の四季をたどるのも、もうこの一度きりだ。ここで角をひろうことができるだろうか。ひろいもののゴールを胸に、あと少しのあいだ、このまちで探検を重ねたい。

味と技の裏には



編集部員のあいだで以前、わたさへ渡邊さとゑさん（79）からもらったフキの煮物が、身が崩れることなく、おいしかったという話題で盛り上がった。これは何か技があるに違いない。さっそく、さとゑさんにどのようにフキの煮物を作っているのかをうかがった。

生み出された工夫

6月26日。十日市場にあるさとゑさんの家にお邪魔すると、2種類のフキの煮物を出してくれた。一つは黒つぶくなるまでじっくり煮こんでから凍らせたもの。もう一つは色が少し薄めでサンショウの葉をまぶしてあるもの。「こつちは冷凍保存してもいいようにじっくり煮込んであるの。ほら、今の時期カビが生えるでしょ」と黒つぶいフキを指して教えてくれる。これは「一年中食べられる用」として、味が落ちないように煮込んだ「伽羅路の佃煮」と呼ばれるもの。太さは生のフキの3分の1くらい。さとゑさんの調理方法は、丸1日水に浸してアク抜きをし、その水を捨ててから2日間かけてじっくり煮込む。この煮込み方がポイント。さとゑさんのやり方は、箸を使っただけ混ぜないというの。鍋を持ちあげて、中華鍋のように前後に大きく振りながらかき混ぜる。そうしないとフキが縦に割れ、スジだけになってしまふ。

最初に煮込む時は、フキが浸るくらいの量のだし汁を入れて醤油と砂糖で味の調節。煮込みだすと汁が減ってくるので、その時にま

た醤油と砂糖、酒を入れて味を調整。最後にもう一度味をみて醤油・砂糖・酒、やわらかくするためにみりんを入れる。こうした作業を2日間かけておこなうと、味がとても染み込んだおいしい伽羅路の佃煮が完成する。

さとゑさんは毎回、目分量で味付けをするのでその度に味が変わる。なるべく薄めの味付けを心がけているという。味付けをしすぎると、しょっぱくて食べることができないために、そのときは捨てるしかないかららしい。最初のころは、人から聞いた調理法と自分の感覚を頼りに作っていた。それから何度も成功と失敗を繰り返していくうちに、だんだんと今の味になったという。

サンショウの葉が入ったフキは、「すぐに食べる用」。1本のフキの大きさも2日間煮込んだものよりは少し大きめ。こちらは30分ほど煮るだけという。その代わり伽羅路の佃煮よりも薄味になるという。サンショウの葉を入れるタイミングは煮込んだあと。これはさとゑさんが香りを引き立たせるために考えた工夫のひとつ。食べてみると、口に入れた瞬間、一気にサンショウの香りが広がり、味が薄いという感じはしなかった。



気持ちを込める

さとゑさんがフキの煮物を作るようになったのは、40年以上前によその家からもらったものを食べて「自分だったらこういう味付けにしたいな」と思ったのがきっかけのこと。そのときから今も、畑にフキを育てて煮物を作り続けている。毎年この時期になると、東京都や長野県、鳥取県に住んでいる親戚や息子さんの仕事先の人にも送っている。

じつさいに、作りかけの伽羅路の佃煮が入っている鍋を見せてもらった。これは、あと1時間ほどコンロで煮込む予定だという。鍋は両腕でも抱えきれないくらいの大きさ。多くの人に送るため、だいたい3回に分けて、1回につき約30kgの生のフキを使い、この鍋で作るという。私が鍋を持ち上げてみようとしても、重くてなかなか持ち上がらない。それをさとゑさんはひよいと持ち上げて大きく振ってみせてくれた。やはり慣れていると手つきが違うんだなと思い、小さく感嘆の声を漏らす。

帰り際に、作りかけの伽羅路の佃煮を少しわけてもらった。作りかけといっても味がす

ごく染み込んでいてこれはこれでおいしい。酒のつまみで食べる人もいると、さとゑさんが言っていた。私だったら、これをおかずにご飯3杯は軽く食べられそうな気がする。取材に行ってからだいぶ日が経つが、今でも空腹時にさとゑさんからもらったフキの味を思い出しては、お腹の虫がよけいに騒ぎだすことがある。何度でも思い出せるところか懐かしい味。それが家庭の味なのかなと考えてみる。「いろんな人に食べてもらうんだから、こんな味にしたらどうかって毎回工夫しながら作るの。それで、『おいしいですね』って言われるとまた作りたくなるじゃない」

さとゑさんは楽しそうに話してくれた。食べてもらう相手がいることが、自分だけの味を追求していくこうとする理由のひとつになる。きつともらう側も、どんな味なのだろうかと食べるのが待ち遠しく感じる。作る側ともらう側をつなぐ手作りの料理。そこには「楽しみ」というお互いの気持ちだが、とびつぎりの隠し味としてたくさん詰まっている。

前澤志依（国文学科1年） Ⅱ文・写真



▲収穫後のフキ畑のようす

写真のフキは小さくて収穫できなかったもの。7月になるとフキの茎のなかに虫がはいるので、収穫は6月の中旬までにおこなう



▲サンショウの葉が入ったフキの煮物



▲伽羅路の佃煮



沢へ

5月1日朝5時頃から昼過ぎにかけて、都留市朝日曾^{あさひそし}雌^{めす}の山間を流れる大旅^{おおだるみざわ}沢と、鹿留^{おおさわ}を流れる大沢にて沢釣りをした。30年以上前からこの辺りで沢釣りを楽しむ父の教えのもと、慣れない沢沿いの道なき道を登りながら釣りを楽しんだ。ただ歩くでも、ただ釣るでもない、歩きながらの釣り。ふだんとは違う目線から沢の魅力を感じることができた。

沢の釣り

沢での釣りは下流から上流へ、川の流れに逆らいながら魚を追って進んでいく。沢の途中には大きな岩が転がっており、岩が水の流れをせき止め、小さな滝を作り出している。小さな滝の下にできる溜まり、なかでも水の流れが緩やかで、数十cmから1m弱深さがあるところ。さらに岩陰など隠れられるような場所に、魚たちは身を潜めている。

沢で魚を釣るときに一番重要なのは、魚がいるポイントと自分の立ち位置の見極めだ。どんなところに潜んでいるのか、釣り上げるためにはどの位置から、そしてどんな方法で針を投げ入れるのかを考え、慎重に動かさなければならぬ。そしてそのポイントに針を落とした後も、感づかれないようにおびき出すにはどのように針を流すべきかなど、一瞬も気が抜けない。

どう動くべきか、それを考えるためには周囲の環境を注意深く見る必要がある。ただ魚のことを考えているだけでは釣りはできないのだ。それを意識しながら釣りをしているうちに、川の周りの植生が気になってくる。沢

歩きに慣れない始めのうちは、手をつく岩にむすコケや足元に転がる石くらいしか見えていなかったが、徐々に慣れてくると河原の自然を楽しみながら釣り歩くことができるようになっていく。川縁にはヤマブキの黄色い花がいつぱいに咲いているところだった。

繋がっているということ

川魚は、人はもちろん糸の影にすら敏感に反応しすぐに隠れてしまう。魚のいるポイントは沢の各所にあるから、投げ損じた場合や、三回ほど投げても当たらない場合はすぐ移動して次のポイントを狙う。多く釣りを楽しむためというのもあるが、魚を驚かせすぎないためにも、一つのポイントに長居しないのが沢釣りのマナーだ。あまりに魚を驚かせると、どんなに条件の整ったポイントでも魚は出にくくなってしまふ。

大旅沢の中流で、周りに障害物がなく、魚影^{ぎよかげ}もはつきり見えている釣りやすそうなポイントを発見した。父は「うまく投げ入れれば（魚が針を）食ってくるぞ」と言う。ところが魚はかからない。針を追って来るようすもなかった。それを見た父は「ここはだめ



大旅沢の風景。水量は少ないが、イワナやヤマメなど、多くの川魚が棲んでいる



[沢釣りをするときの装備品]

右のシューズは川のなかでも滑りにくいように、靴底が工夫されている。左は釣り専用ベスト。ポケットがたくさん付いていて、道具を持ち歩くのに便利だ。胸には、川で魚を釣るために必要な入漁券をつける。入漁券は釣具店やコンビニで購入できる

[今回の沢釣りで使用した、「フライ」と呼ばれる毛針]
釣り場の近くに棲む虫に似せて作られている。右は蚊に似せたもので、左は羽虫に似せたもの。どちらも父が、鳥の羽と糸とを針に巻き付けて作ったものだ。2人で釣りをするときにはいつも、父お手製のフライを使う



だ。良いポイントだけでなく他の釣り人にだいい驚かされているから」そう言つて上流へ進んでいった。

荒らされたポイントに当たるのは、私の沢釣り経験のなかでこれが初めてのことでなかった。私はこのようなポイントに当たるたびに沢釣りの難しさを感じる。釣ることに意識を向けているだけではないのだ。「あとから来る人のことを考えて」、父は私に何度もそう言つた。沢と自分だけでなく、自分とほかの釣り人との繋がりをひしひしと感じた瞬間だった。

沢、その魅力

今回の釣りでは、私の釣果はゼロだった。それでも私は沢釣りが好きだ。魚を釣り上げること以外の魅力が沢にはある。川縁の植物や小さな羽虫、目の前を凄まじいスピードで駆け抜けていく小さな鳥。そのすべてを感じながら釣りをする。沢では、多くの生きものが手の届くどころか、顔が触れてしまいそうな距離にいるのだ。じつと凝らして魚を探す目が、いつの間にかまったく関係のない鳥に奪われている。私にとっての沢は「釣り」と

いうよりも、「出会い」の場なのかもしれない。

アメリカのナチュラリストであるH・D・ソローは、彼の著作『ウォールデン 森の生活』のなかで、釣りを魚との「交信」と表現しているが、私の解釈はまた少し違う。釣りという行為したい、私はスポーツや遊びというよりも、「問いかけ」というふうに解釈している。釣りのなかで、自然や魚と交信できるまでの知識や技術・経験が足りていないだけなのかもしれない。でもだからこそ、私の沢釣りはいつも新しい出会いに溢れている。

なぜこの魚はこんなに上流まで上つてきたのか、どうして川縁にはこの木がたくさん生えているのか、あの虫は……というように、一歩進むたびに不思議との出会いがある。その不思議が自然への問いかけになっていく。どんな形になって答えが返ってくるのかもまだ分からない。それでも私の針を追ってくるあの小さな魚が、私の問いかけにどう答えてくれるのか、それが知りたいから「また行こう、また歩こう、また釣ろう」と思うのだ。

持田睦乃（社会学科3年） 文・写真



初夏の公園

～木陰をさがす～



都留に来て一年目の夏、よく散歩をしていた。街並みを知りたくて始めたものだったが、気が付くと毎回同じコースを辿ってしまう。なんとなく、公園の前を通りたくなる。公園が創り出す独特の雰囲気、まだ馴染みのなかった都留でのくらしへの緊張感が和らぐような感覚があった。都留に住んで3年が過ぎ、ふと公園のことを思い出し、あの不思議な魅力にふれたくなって、都留のさまざまな公園を訪ねてみた。

6月17日の午後1時前、友人と大学を出発。日差しが強い。最初に、田原にある二の側公園に向かう。とても小さな公園で、屋根の付いたベンチと2台の滑り台が一体となっている遊具が設置されている。この日の快晴の空に、鮮やかな色づかいの遊具はよく映えていて、久しぶりに遊具で遊ぶでみたくなった。わくわくしながらはしごを上って滑ったがあまりにもあつという間に滑り終わってしまい、ちよつと物足りなかった。子どものころとまったく同じようには公園を楽しむことが出来ないと感じて、少し寂しく思えたが、それでも変わらない自分のなかの公園の魅力は何なのかと思う。気温が30℃を超えて日差しが強さを増すな



二の側公園 6月17日撮影



白木山公園 6月17日撮影



城南公園 6月17日撮影

か、次の公園に向かうペダルをこぐ足に力が入る。

目指したのは、下谷にある白木山公園。地図では山のふもとに位置していたので、木陰のたくさんある緑豊かな公園を想像しながら向かう。示された場所に着いても公園らしいものが見当らず、心身ともに暑さに弱ってきたので、近くにあった文化会館の職員の方に尋ねてみることにした。その方のお話によると、公園は文化会館の裏にあるものだが、落石があったので現在は封鎖されたということだ。許可をくださったのでロープを潜って入ると、草木が生い茂っていて、少し広い山道のようなだった。後日調べてみると、こは風致公園という、景観を味わうための公園に区分されていることが分かった。

この日の最後に、城南公園を訪れた。足

を踏み入れるのは2年ぶりだった。白木山公園からこの公園までが緩やかな上り坂になつていたうえに、到着した午後3時ごろはこの日の最高気温の35℃となつていて、へとへとだった。そんななかで、着いてすぐ目についたのは、ブランコのある一画。隣に大きな木があり、枝葉がよく茂つていて、ブランコのある場所に木陰をつくっている。楽しそう、というより涼しくなりたい、という欲求からブランコで遊びたくなった。木陰のもとでの風を切るブランコ遊びは想像以上に涼しくて、また思っていたより楽しかった。

*

7月13日、午後12時半ごろ出発。都留市玉川にある、玉川公園に向かった。運動場があり、グラウンドの外には植え込みや遊



玉川公園 7月13日撮影



楽山公園 7月27日撮影



具もある、今回訪ねたなかで一番広い公園だった。グラウンドの隅には木陰となつて、いる一画があり、ベンチも7、8台あつて、運動場を見渡せる位置にある。この日も30℃を超えるじりじりとした暑さで、枝葉がおとすシルエットに包まれて水分補給をするとはつとした。ときおり吹く弱い風が、木の葉をやさしく揺らすシャワシャワという音が心地良く、日々誰も訪れない時間こんな空間・瞬間が存在していると思うと、何だかもつたに感ぜられた。

*

7月27日、午後3時に友人と出発。楽山公園に散歩に行く。授業で何度も歩いた場所だったけれど、季節とともに雰囲気も大きく変わっていた。入つてすぐ、20〜30mほど続く見ごろの青紫のアジサイに目を奪

われる。そして、散策しているあいだ中ずっと夏を感じさせてくれたのが、セミの鳴き声だった。アブラゼミのほかに、ヒグラシも鳴いていた。また、春と変わらず生い茂る木々は日差しをさえぎってくれて、夏を目と耳で感じながら、爽やかな気分が散策することができた。

やさしい、すずしい空間



公園に行く、というとき小さいころはひたすら動き回って遊ぶことを楽しんでた。けれど、今回は、いろんな公園を訪れて、夏の公園の魅力は、木陰から眺める公園の風景そのものかもしれないと思った。冷房のよく効いた屋内からまったく違う世界のような灼熱の戸外に出て、落差に麻痺しそ

になりながら、公園で木陰を見つけ、ひと休みする。子どもたち、ブランコ、散歩する人、手入れの行き届いた植え込み……いろんな要素が作り出す空間は、きつとどこにでもある風景だけど、少し離れて眺めていると、その穏やかさに気づいて、すごく心が和んだ。

家電製品の与えてくれる無機質で均一な涼に慣れていると、木陰から得る涼はささやかで物足りないように感じるかもしれない。けれど身を置いていこううちに、ときどき風が吹いたり少し陰つたりしてできる、むらのあるすずしい空間は、自然のなかに溶け込んでいるような感じがして居心地が良くなってくる。2年前はすずしくなつてからの散歩だったが、今回は炎天下のなかだったため、自分にとっての公園の魅力のほかに、自然のなかに「すずしさ」があることを実感できた。どちらも最近の自分にとってひどく非日常的なものになつていたと思う。今回の体験をきっかけに、今年はスイッチを押すだけではない、もっと能動的な「涼」み方を楽しみたい。

平井のぞ実(英文学科3年) 文・写真

写真で振り返る今昔

大学周辺の山々の記憶

現在大学が建つ周辺の山々は、昔はどんな姿をしていたのだろう。『奥隆行コレクション』（本学フィールド・ミュージアム所蔵）の古い写真を見ながら十日市場在住の渡邊宗男さん（80）に、昔の山のようすをうかがった。



通し番号 1877 「競馬場のにぎわい」

現 在、都留文科大学のある場所は「谷村競馬場」として、大正13年（1924）

から昭和5年（1930）までのあいだ市民の娯楽の場として親しまれていた（本誌57号参照）。

「どうじ山つつうだよ。もっこは競馬山だ」

今でいう附属図書館横の山を「どうじ山」、楽山公園のところを「競馬山」と渡邊さんは呼んでいたという。

競馬を観戦する人たちは、競馬山の斜面に座り競馬を楽しんだ。写真の右奥にもそのようすが見てとれる。

それに対して、どうじ山は競馬場の尻の側（馬券売り場の反対側）にあつたため、漢字を当てると「馬尻」。つまり「馬の尻尾を目で追った場所だったから」どうじ山と呼ばれるようになったそうだ。競馬が山の名前にまで影響を与えていたことは驚きである。

大学のうら山の大桑山を考えても、一面クワ畑だった過去がある。そう思うと、山ですること・みるものが、名前に関わりを持っていたような気がしてならない。



現況 (2010年5月20日)



通し番号 1875「整地中の競馬場跡」

ここに昭和40年（1965）頃、どうじ山から撮った写真がある。一面に畑が広がり、山の斜面には段々畑。この写真は大学建設のための整地事業のときのものである。平らになっているところが競馬場跡だ。

渡邊さん曰く、写真左奥の段々畑付近が現在の楽山公園ではないかとのこと。現況を比べてみると、角度が微妙に違うがマツの生えた山の稜線が一致する。およそ45年のあいだの変化とは思えない。机に座り勉強しているこの場所で、ついこの前まで畑を耕していた。それが何だかおもしろくて、何度も写真を見比べてしまう。

山という切り口で昔の記憶を振り返る。そこにあつたのは、現在とはまったく違う山の姿だった。今回お話をうかがって、記憶を記録しておくことの大切さを改めて実感した。もしかすると、また50年経ったときこの場所の景観は大きく変化しているかもしれない。そう思うと何だかウズウズする一方で、物寂しさも感じた。

西丸堯宏（社会学科4年） 文・現況写真

かざりや
銑屋さん
の想いに
ふれて



魚子を打つ慶さん

都留の町を散歩したとき、都留市立図書館に向かう細い路地にある金比羅神社に寄ってみた。そのときに聞いたのが神社の銑を造っている職人さんの話。銅に金メッキを貼って造られた銑は、柱、屋根、扉などのいたる所にあつて神社の存在を一層ひきたてている。こんな銑を造る職人さんは一体どんな人なのだろう。

金比羅神社にて

「行つた方がよいよ！　すごくおもしろいですよ！」

話をしてくれたのは金比羅神社の金子^{かねこ}壽元^{ひさもと}さん（52）。銑を造る濱田^{はまたみ}実^{みのる}さん（62）がどのような人物なのか教えてくれた。

実さんは県内外の寺社や、御神輿の銑を造っているという。中央四丁目にある専念寺の破風板（屋根の部分）にいる天女も実さんが銅板から造り出したそう。その天女の小さな爪にもこだわりがあるという。

天女自体がCDくらいの大きさ。爪なんて下から見たらわからない。けれど実さんは「下から望遠鏡で見る人がいるかもしれない

いから」と言っただ。小さなところまで手を抜かない。いや、小さいからこそ手を抜かないのだろうか。実さんの人物像を頭のかで考えてみる。しかし職人という言葉のイメージが強すぎるせい、頑固で厳しそうなイメージしか浮かんでこなかった。

「鋳屋」

朝日馬場にある実さんの家を訪ねたのは7月4日。庭には十数台の車やドラム缶があり、ごたごたしている。きよろきよろしながら少し奥に行く。出迎えてくれたのは司さん(38)と慶さん(37)。二人とも実さんの息子さんだ。少し離れたところで作業をしていた実さんにも挨拶をしてお話を伺う。

三人は家族で仕事をしている。仲良さそう



金比羅神社の社殿の扉の鋳。
魚子がびっしりと打ってある

に会話をする実さんたちを見て、家族で仕事をする職場は温かい雰囲気ではないなと思った。

実さんは自分たちの仕事を「鋳屋」という。職人というよりもどこか親しみやすく感じるその言葉。それは「鋳」という言葉に華やかなイメージがあつて、職人という堅いイメージを和らげているからなのかもしれない。

鋳を造るときはまず模様から。鋳の模様はある程度決まっているが、それを崩さないうようにしながら濱田さん独自の模様を加える。そうして考えた模様を金属の板に転写し、彫つたり、打ち出したりして形にしてい。片手の人差し指と親指で作った輪くらいの大きさの金属に観音様を形作るような細かい作業ばかり。造っているときは無心で作業に打ち込むそう。実さんにお話を聞いているあいだも、時々、カンカンと司さんが金属を打つ音が響いた。

驚いたのは鋳を造る道具も造る、ということ。自分に合った使いやすい道具を造るそう。道具まで造ってしまうなんて、「仕事」自体が手造りみたいだ。

魚子打ち体験

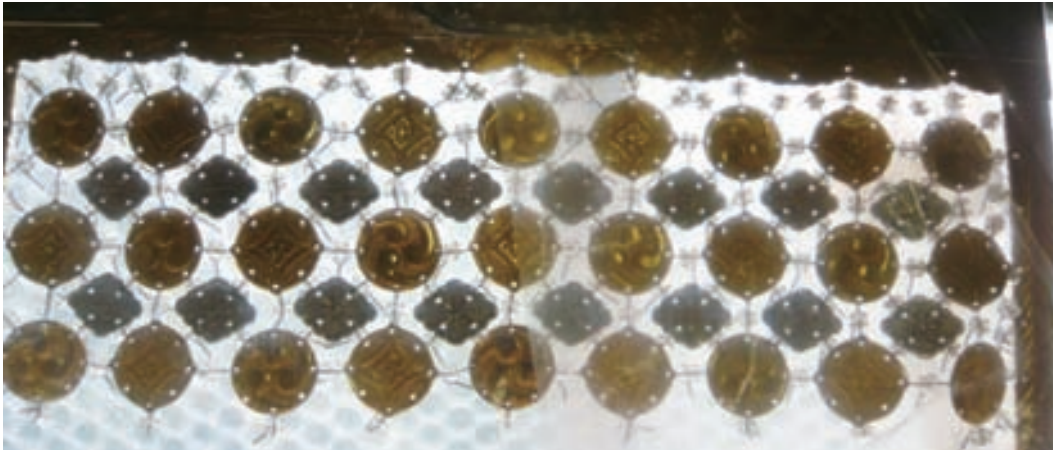
金比羅神社で金子さんに聞いた魚子の話を切り出して。魚子とは金属に打たれたいくつもの丸の模様のこと。「魚子で決まるんですよ、ものはね」。「魚子をきれいに



蠟でとった鋳の型

するようにしたんですよ」と実さんは言う。魚子をきれいにするとはどういうことだろう。完成したきれいな魚子しか見たことのない私には、きれいではない魚子が想像できない。そこへ「魚子体験してみる？」と慶さん。滅多にできない貴重な体験だ。ご好意に甘えて体験させてもらうことにした。

右手に金槌、左手に鑿たがねという道具を持って金属の板と向かい合う。金槌に力をいれるときには、手首を使う。布団を叩くときみたいに叩く瞬間に力をいれる。鑿を持つ左手には力を入れない。鑿に金槌が当たる位置によって丸の表れ方が変わってしまうからだ。



環珞（ようらく）という銚。生出（おいで）神社の御神輿にもついている

均等に力が入るように慎重にやってみる。頭では説明通りにやろうとするのだけど、なかなか上手にできない。打つ力を弱めすぎてくつきりした丸にならなかつたり、一部だけがくつきりしてほかのところは薄かつたり。なんて難しいのだろう。こんなに難しいものをまっすぐに並べていくなんて、かなり高度な技だ。

慶さんは位置合わせさえすれば見なくても打てるという。やつぱり長く続けてきた人は素人とは全然違う。

実さんたちはこの魚子を星の数ほど打ってきたのだろう。ひとつのものを仕上げるだけでもものすごい労力を使うに違いない。銚に見え隠れする技は造った人の経験と苦労を物語っているのではないかと感じた。

「銚屋」であること

「スーツと革靴が嫌いなんです。それだけです」。

どうしてこの仕事をしようと思ったのか、という私の問いに答えてくれたのは慶さん



彫金する慶さん。力の加減が難しそう



紗綾形（さやがた）。金属に模様を写すときに使う型紙



魚子を打つときに使う鑿。道具も手造り

だった。でも「やつぱり好きじゃないと続かない」という。そうだなあと納得。好きなことだから辛いことがあっても続けていくことができるのかもしれない。嫌いなことならどこまでも上を目指そうとは思えないだろう。

もうひとつ、やりがいについて尋ねてみた。少しの沈黙の後、「死ぬときにわかるんだろうね」と慶さん。その言葉がなんだか不思議な響きに聞こえた。それでも私のなかにスツと入ってくる。

私はこの言葉の裏に、死ぬまで飾り屋であり続けるという決意と、この仕事の価値を見極めたいという強い想いを感じた。

「10年くらいやっただとしてもまだまだ」。「自分の仕事に満足したらもうそれ以上必要ないもんね」。「ちょっと上手くなつたからといって親父を超えたなんてなつちやうともうその人は終わりだと思っし」。どこまでも上を目指そうとする司さんと慶さんの言葉。こういう言葉がすんなり出てくる二人からは、この仕事に対する熱意が伝わってきた。

好きなことを見つけてそれを続けていくことって、簡単なようだけどじつはすごく難しい

なことだ。好きなことが自分のなかにあったとしても、一歩踏み出す勇気がなくてやらないうで終わることはたくさんある。自分は今一杯何かに打ち込むことができているだろうか。実さんたちのものを造る姿勢に触れてそんなことを思った。

手造りのものには造った人のものに対するこだわりや、さらに良いものを造ろうとする向上心など、たくさんの想いが込められている。想いだけではない。経験も努力も技も、それが機械で造るのとは違う、あじなのだ。私は思う。ものを見て何かを感じとる。その瞬間が造った人の想いに触れるときなのかもしれない。そうして感じとった何か。それはきつと、あじのあるものを見た人のなかで生き続けるのだろう。

何気なく見ているものをじつと見てみる。その先には新しい出会いがあるかもしれない。自分のなかで新しい世界が広がるかもしれない。ものは、少し意識するだけで自分と何かをつなぐきっかけになり得るのだ。

こちら、つる 探偵局

何だか気になる不思議な場所、不思議なもの。
あなたの身近にそんな「謎スポット」はありますか？
そこには、ただ素通りしてしまうだけではもったいない、
さまざまな「物語」があるのです。
このページでは、毎回都留で見つけた謎スポットを取りあげていきます。
さあ第4回目の謎は・・・



Case 4

うなぎさんの供養塔

TSURUTAN

つる探偵局に調査の依頼が舞いこんだ。一風変わった供養塔があるので、ぜひ調べてほしいとのこと。早速、調査開始だ。

その供養塔があるのは、『フィールド・ノート』51号でも取り上げられたことのあるアパート「輩」^{やしろ}。大学すぐ近くにある輩は、男子専用のまかない付アパートとして有名だ。

輩の前まで行ってきたきよきよと供養塔を探す。建物の入り口には前庭があつて、手入れされた松やツツジなどの植物が目とませしてくれる。庭木をひよいと覗いてみると、ちよこんと建っている供養塔を発見した。高さ30cmほどの四角柱の供養塔。ちらつと見ただけでは何の変哲もないように思えるが、よくよく見れば少し風変わりなことに気づく。供養塔に刻まれているのは「鰻」^{うなぎ}の文字。そう、輩にあるのは「鰻の供養塔」なのだ。

アパートの前に、鰻の供養塔。謎の香りがぶんぶんする。

しげしげと眺めていると、輩の大家である東晏江さん^{あづまやさえ}（77）が声をかけてくださった。晏江さんと一緒に供養塔を眺めながら、お話をうかがうことになった。

何故アパートの前に供養塔があるのか。その答えは、輩の過去にある。



答えは「割烹あづま」にあり

アパート輩が始まったのは、2002年のこと。それより前じつはここは「あづま」という割烹料理屋だったのだ。

——あづま開店は、今から50年ほど前。

あづまは活魚が売りの店だ。店の入り口のすぐそばに大きいけすがあり、伊勢えび・鯛・鰯といった海水魚から、鯉・鰻の淡水魚、さまざまな魚が泳ぐ。当時珍しかったいけすを一目見ようと、遠く大月、甲府、富士吉田からお客さんがたくさんやってくる。2階の100畳間では100人規模の大きな宴会がよく催され、10人以上いた大学生のアルバイトさんもてんでこ舞いの忙しさだ。

あづま一番の名物は鰻。あづまでは毎日のように鰻がさばかれていた。毎日毎日、鰻が何匹も頭を叩かれて殺されるのに心を痛めた晏江さん。鰻の供養塔を建てようと思いついたのは、商売を始めて5年ほど経ったとき。「毎日殺してたからねえ。可哀相だなと思って私がやりたいということをやったですけどね。そうだね、いいねって板前さんたちも言うって」
当時は、晏江さんだけでなく、気づいた人が仕事の合間にお線香をあげていたという。供養塔を見て晏江さんが「やあねえ」と笑う。

「何だか下手くそな字だねえ、よく考えれば」
供養塔に刻まれた文字は、何と晏江さんが自分で書いたのだそう。供養塔に、何だかあたたかみのようなものを感じるのはそのせいだろうか。あづまの人たちにずいぶんと大切にされてきたようだ。

「ごめんねえ、と恥ずかしそうに晏江さん。「軽い気持ちでね、したことだね」。ただそれだけのことなのよ、と困ったようにはにかむ。

「でも今になってみなさん、これはどうしたんですかと尋ねてくれるけど」

供養塔について尋ねる人は、やはり少なからずいるみたいだ。

供養塔が伝えること

まかないの準備を終えたご主人の正義さん(77)が出てきてくださり、3人で供養塔を眺めながら話をした。話のメインは割烹あづまのこと。文大出の板前さんの話、あづまを鼻根にしてくれていた大学の先生の話……それから、輩の建物に残るあづまの跡。

輩の玄関を開けて真正面に見える、幅2m近くある大きな階段。「アパートにはあんまり似つかわしくないでしょ」と正義さんが示す、前庭の石灯籠。前庭に置かれているいくつかの庭石もあづま時代からのもの。ここは

水が流れていてね、と石の上に残された水の道筋を手で示してくれる。店を始めたときに植えたという松の生長ぶりに「50年もたつと太くなるもんだねえ」とお二人は感慨深そう。こうしてひとつひとつ教えてもらうことで、今は無きあづまの様子が思い描けるようだ。

「お嫁に来たときは今の場所に大学もなかったし、合同庁舎もなかったですよ」と、晏江さんが懐かしそうに話す。

大学ができて合同庁舎ができて、さまざまな店が立ち並んで。そうしていつしか時代は流れ、だんだんと大きな宴会が催されなくなり、あづまは輩へと形を変えた。東さんご夫婦は、ずっとこの地でこのまちの「変化」を見てきたのだ。

それでも、変わらないものは確かにある。今でも輩のそこかしこにあづまの名残が残されている。もちろん供養塔もそう。小さな鰻の供養塔への疑問をきっかけに、あづまの歴史まで知ることができた。まるで、供養塔が教えてくれたみたいだ。

お二人にお礼を言っただけで、もう一度供養塔を見やる。うーん、お前すごいなあ。改めて見た供養塔は、単なる「供養」のためだけではない、もっと大きな使命をおびてそこに立っている気がした。

杉山由貴乃(国文学科4年) = 文・写真

都留市の旧5町村を巡る(1) 旧東桂村

梅がつなぐ過去・未来

1954年4月29日、旧谷村町、宝村、盛里村、禾生村、東桂村が合併して、都留市が誕生した。

「都留市の旧5町村を巡る」では、各地域を渡り歩き、気になる人やモノから、その地の風土を探っていく。

1回目は、鹿留古渡地区にて栽培されている「梅」がテーマ。じつは、都留の市の花は「梅」だ。合併前の旧5町村を梅の五弁の花が表現している。まだ見ぬ土地を、梅から探求してみるのも面白そうだ。

崎田史浩（社会学科4年）＝文・写真

都留市の旧5町村



(1) 旧東桂村

1893年に桂村が分村して西桂村と東桂村が誕生。地名の由来は東半分にわかれたことから。旧東桂村は、夏狩村、十日市場村、鹿留村、境村で構成される。

そ

の地名を「こわた」と呼ぶことすら、今回の取材をするまで知らなかった。

都留市鹿留に含まれる古渡地区には、尾崎山の西の裾に沿って集落がある。古渡の梅についてあてがなかったため、「東桂地域コミュニティセンター」を訪れて情報を仕入れることから始まった。すると、古渡で三枝秀雄さん（74）が梅を栽培しており、奥さんも梅干しや梅ジャムづくりに熱心だということがわかった。電話をかけて取材をお願いしたところ、さっそく梅畑を見せていただけることになった。

大学から自転車約10分、国道139号線の左に「古渡」と表記された標識が設置してある道に入っていくと、鹿留川にかかる古渡橋がある。橋を渡って直進した道に入ると三枝さんの梅畑が広がっている。開花期には、梅の花が一面に咲き誇り、美しい景色が広がるのだろう。「古渡で梅が密集しているのはこのあたりくらい」と三枝さんが教えてくれた。もちろん、花も見ごたえがあるのだが、古渡の梅は花の観賞が目的ではなく、実を収穫するためのものだ。手入れがされている梅の木は、高さが2m前後で統一されており、

枝の剪定も適度にされている。まさに、「実を出荷するため」の梅がそこにはあった。

「あそこに山があるから、この地域は日の出が遅くて、日の入りが早い」と、三枝さんが尾崎山を指した。「冬になると、もつとも遅い日の出は9時15分ごろ」になるくらい、日照時間が短い土地のようだ。だが、これが梅を栽培するには適した気候条件だという。三枝さんが生まれたときには、すでに実家には梅があつたとお聞きした。昭和30年ごろには、実の収穫のために当時の都留短期大学の学生をアルバイトで雇っていたくらい、収穫期は繁忙を極めていたそうだ。

古渡の梅には、いくつか品種がある。この土地に適しているという「小梅」。毎年必ず実をつける「養老」。そして、天候に左右されやすいが、大きな実をつけて肌もぎめ細かい「白加賀」がある。三枝さんは、毎年6月中旬ごろに梅を収穫して梅干しやジャムをつくっている。古渡には、120戸ほどの世帯があるそうだが、今でも十数軒が梅の栽培をおこなっている。収穫した実は自家消費するほか、青梅を市場に卸しているという。お話を聞きながら、手づくりの梅干しをいただいた



三枝さんからいただいた梅干し。左が「小梅」、右が「白加賀」。小梅は一口サイズで、カリカリした食感を楽しめる。白加賀は、種が小さく肉厚だ

た。「白加賀」の梅干しは、肉厚で実も大きく、ほどよい塩加減だ。梅干しの赤みは畑で採れたシソの葉だけで着色されている。まさしく、古渡の恵みが詰まった本物の味。その地域ならではの食との出会いは、古渡の梅の魅力をいつそう引き立てる。

知恵の実——「梅」という選択——

山に面した場所を中心に、梅畑がつくられている古渡。田んぼや畑のそばにも梅が何本か並んでいるのを見かけた。地域一帯に梅の広がりが確認できるが、いつから梅が栽培されるようになったのだろうか。三枝さんの梅畑に隣接した土地で、梅の手入れをしていたおじいさんに聞いてみた。すると、「昭和20年以降だった」と答えが返ってきた。どうやら、地域で一斉に栽培に乗り出したのがそのころからだったようだ。

けれど、なぜ梅だったのだろうか。日陰がよいとされる梅の栽培に適した土地だったこと以外に、「このあたりは石が多くてコメや野菜をつくりにくかった」と、地理的な課題もうかがえた。山に面した地域だからこそ、農業も一筋縄ではいかなかったのだろう。古渡

で生きていくための知恵と決意が梅には込められていたのだ。

昭和20年以降から栽培されはじめた梅は、昭和50年代には古渡を気づけた。古渡の自治会長を務める秦仁さん(69)によると、「全盛期には、沼津からも業者が買いつけにきた」ほどの収穫量を誇り、豊作の場合、一本の木から50kgもの実が採れた。また、古渡で「志村商店」を営む志村繁さん(78)は、「当時は、会社を休んでも梅をもいでいた」そうだ。じつは、梅自体はずいぶん前から栽培されていたのだが、実が高値で取引されるようになった昭和20年以降、古渡全体でこぞって梅の栽培が始まったという。

ただ、最近は収穫量が減っている、とお話をうかがった全員が口にする。とくにここ7年は厳しいようだ。因果関係ははっきりしないが、受粉を手助けするミツバチが花に寄りつかなくなったことや、開花時に降る雪が花芽に悪影響を及ぼしているのではないかと考えられている。

「昔は一本の枝に垂れ下がるように梅の実が生っていたけど、今ではあちこちにちよつとずつ生っているのを取らなきゃいけない」。

こう語るのは、梅農家の三枝信明さん(85)と和美さん(82)。「一本の枝に垂れ下がるようになってきている状態を「鈴生り」と呼ぶ。今では多くみられない光景のようだ。「あのころは業者がたくさん来て賑やかだった」と話す和美さんの寂しそうな表情が胸に残った。

未来をつなぐ過去の歩み

地域の歴史は、さまざまなモノに投影されている。古渡の梅もそのひとつだ。梅畑で見た、収穫を今か今かと待ちわびるかのように入っていた梅の実は、古渡の風土を色濃く映す鏡でもあった。過去の記憶を探ることで、今見える世界の受け止めかたも変わる。

現在は、利益を見込めない経済的事情などで、昔ほど手をかけられないのかもしれない。惜しいなと思っても、梅とともに生き続けるのは地域に暮らす人である。次の世代には、梅はどう受け継がれていくのだろうか。

先人の築いてきた歴史を知ることが、今だけでなく、未来を構想する手段ともなりうるはずだ。その地の歴史と向き合うことを、これから都留市の旧5町村を巡る視座としていきたい。

参考文献

『都留市地名事典 第22・23号「郡内研究」合併号』

都留市郷土研究会／2012 [2012年度73号掲載]

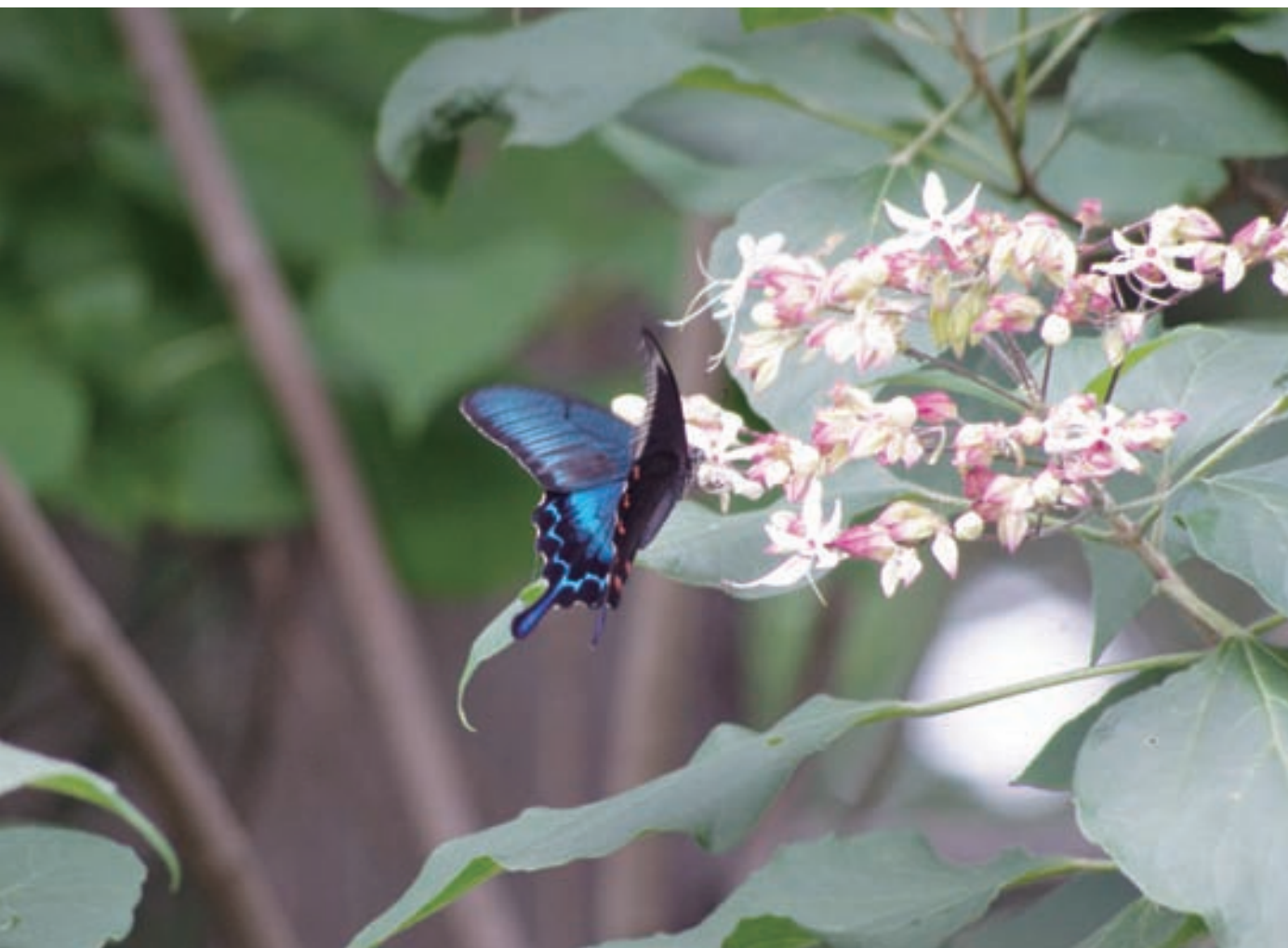
第14回

フィールド・ミュージアムのたのしみ

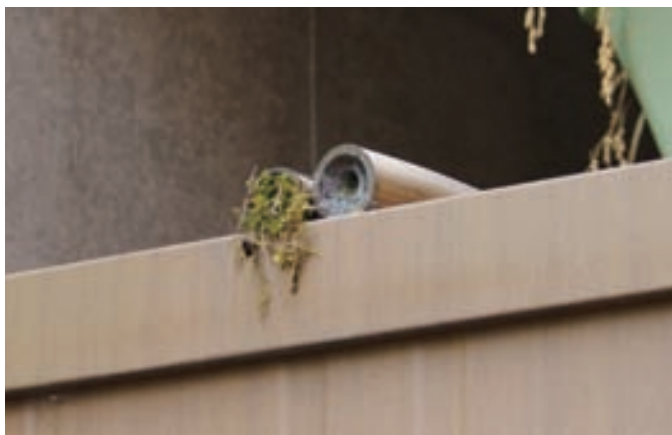
H・D・ソローが『ウォールデン 森の生活』（今泉吉晴訳、小学館）で示唆した散歩のほんとうの意味とは何か。散歩をとおして見えてくるものとは。私たちは歩くことで、変貌する自然やまちの今を記録し、フィールド・ミュージアムのたのしみを報告していきます。

その事象に立ち会うということ

●文・写真 西教生（本学非常勤講師）



クサギで吸蜜するカラスアゲハ



アルマンモモアカナバチの巣



羽化してすぐのアブラゼミ

ソ

ローは『ウォールデン 森の生活』で、池の水温の変化を例に「一日は一年の縮図です。夜は冬、朝は春、昼は夏、そして夕方は秋です」（第七章「春」と書き、小さな世界に大きな全体を見えるという観察の一例を展開しています。私はこの表現がとても気に入っているわけですが、自然観察をおこなうさいに重要な視点でもあると感じています。

一日のなかでも気温や日照条件は大きな変化があり、生きものが活発に活動をする時間帯はそれぞれの種類によって決まっています。夏の散歩のたのしみのひとつは、昆虫を観察することでしょう。たとえばヒグラシの声を聞いたり、その透明の翅を見たいと望むのなら、晴れた日には午後遅くに山に行く必要があります。また、春から夏の終わりにかけて、山にはいろいろな花が咲きますが、そこに来るチョウやカミキリムシの仲間などの昆虫を見るには、昼前から出掛けるのがいいでしょう。

昆虫が生活している小さな世界の時間から、彼らの暮らしを考えたとき、私たちが目にする事象はどういう意味を持つのでしょうか？

それは多くの場合、偶然であり、予想のできない出会いであることが少なくありません。

ある日、物置の上に置いてあった竹の穴にコケが詰め込まれていました。竹や木の穴にコケを詰めて巣を作るのは、アルマンモモアカナバチです。ハチの姿を確認できなくても、それとわかる痕跡に気づけば出会えます。またある日の夕方、羽化中のアブラゼミを見つけ、その場面に立ち会いました。これらは決して珍しいものではありませんが、普段の生活ではあまり目にしない事柄です。自分の日常のなかで起こる出来事であるからこそ、その不思議さに見入るわけです。それは、彼らが近くに生きていることを知る嬉しさとも言えるでしょう。

ある事象に立ち会い、見届けることは、そのものと深く関わることであります。おそらく、そこに長い時間は必要ではなく、大きな全体を捉える視点で見ることが大切になってきます。そのために日々、広く、遠く歩き、さまざまなものを観察していきたいと考えています。

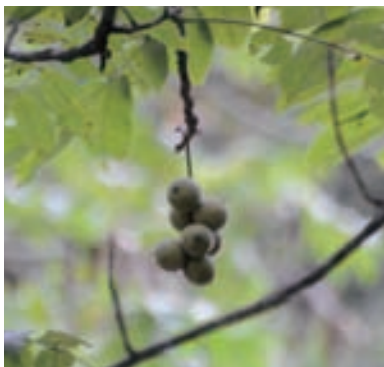
第6回

フィールド・ミュージアムのたのしみ

H・D・ソローが『ウォールデン 森の生活』（今泉吉晴訳、小学館）で示唆した散歩のほんとうの意味とは何か。散歩を通して見えてくるものとは。私たちは歩くことで、変貌する自然やまちの今を記録し、フィールド・ミュージアムのたのしみを報告していきます。

私たちの夢にかさなるリスと一本のクルミ

●文・写真 北垣憲仁（本誌発行人）



オニグルミの果実

夏になると森のなかでクルミを食べるリスに出会う機会が増えます。都留では8月下旬になるとクルミの堅い殻の合わせ目に沿って二つに割り中身を食べた痕が見られるようになりますし、森を歩くと遠くからクルミの殻を囓る音が聞こえることもあります。

私にはリスについて以前から解いてみたい謎がありました。枝から垂れ下がる果実をどのように安全な場所に運び食事をするのだろう。これまでリスと出会っても動きの細部までいねいに観察できたことはありません。俊敏なうえ、私が少しでも

動くとき警戒してすぐに移動してしまいます。クルミを食べるリスに運良く出会えたとしても、たいていは高い場所を食べるためうまく動きを観察できません。

まとまった時間がとれる夏こそリスの観察にふさわしい。前から抱いていた疑問をじかに確かめたいと考えていました。

9月5日、ようやく明るくなりかけた朝5時30分、私は一本のクルミの木の下で観察を始めました。幅3mほどの道の脇に生えるそのクルミは高さ約15m、胸高の直径が30cmほど。この高さであれば動きを追いやすそうです。枝は広く伸び、道を挟んだ隣の森とを空中でつなぐ天然の橋になっていきます。すでに緑色のクルミをリスが食べているらしく、細かく剥ぎ取られた果肉と、二つに割られた食べ痕が道の上に落ちていきます。私はこれまでの経験から、リスになるべく警戒されないよう、まずはクルミの木から10mほど離れてじつと観察することからはじめました。



食事をするリス

6時30分、すっかり明るくなった森から枝を伝いながら1頭のリスがやってきました。素早い動きに目が慣れないためか、はじめ視界のなかに姿が見えたととき、その直線的な動きで鳥と間違えてしまいました。姿を追っていくと枝伝いに走り、ジャンプを繰り返しながらクルミの果実の場所までやってきます。果実を口にくわえて移動し、水平に伸びる太い枝の上で食事を始めました。囓りとった果肉の細かい破片が地面に落ちてきます。高い位置での食事のため、私の目にはどのように果実を口にくわえて運び去ったのかなど細かい動きは観察できませんでした。リスは毎朝、決まった時間にこのクルミの木にやってくるわけではあ



クルミの房を運ぶ

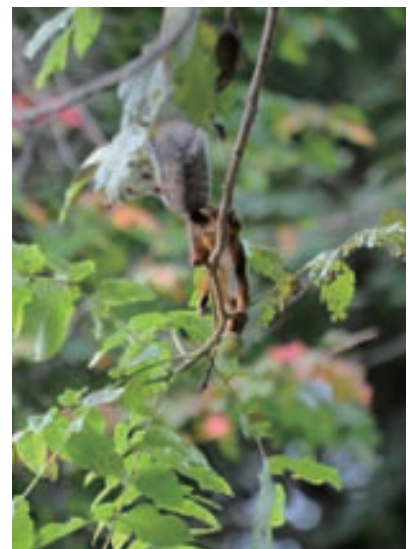
りません。天候にも左右されますし、ときには姿を見せないときもありです。観察する時間は3時間ほどですが、そのあいだに枝や葉につく虫を食べにやってくるシジュウカラの群れや、陽の当たる葉で休むチョウの仲間との出会いを楽しめます。毎日同じ場所で観察を続けると、一日として同じ日はないということや、一度にさまざまな出来事が自然のなか

では起こるということが生きものたちとの出会いを通して実感できます。都留市の十日市場にある大きなクルミは数万もの実をつけます。それに比べるとまだ樹齢の若いこのクルミの実には双眼鏡で数えると数百ほど。けれどもこの木だけで3頭のリスがやってきています。リスははじめ木の高い場所にある果実から食べていましたが、次第に私から近い位置のものも食べるようになりました。

9月15日、いよいよ地上から2mほどの距離の果実にリスがやってきました。警戒しているのか、体の動きを止めながら4個ほどの果実の房に近づきます。後ろ足で体をしっかりと保ち、ぶらさがるようにして果実に鼻を近づけ調べるしぐさをします。そして1個の果実を両手で挟み口にくわえ、房ごと運び去りました。あまりに速い動きのためどのようにして枝から房を切り離したかまでは観察できませんでしたが、くわえた4個の果実の房を高い位置にある枝まで運び、食事をはじめました。リ

スが食事を終えて森に帰ったあとで、地上に落ちていた緑色の果実を拾い、重さを量ってみました。1個が約20g。果実4個で体重の3分の1から4分の1に相当します。4個の果実の房をくわえ、迷路のような木を迷うことなく安全な食事場まで移動するリス。一本のクルミの木とリスとのあいだで展開される予想もしないこうした行動は、強烈な印象として私の心に刻まれました。

9月19日、クルミの果実は数個を残すだけとなりました。毎日、付近を散歩しているというかたが立ち寄り、一緒に観察することになりました。長年、あたりを散歩しているけれどもこの木にリスがやってくるのは知らなかったと言います。二人でじつとしていると、もつとも低い位置にある果実にリスがやってきました。後ろ足で枝をつかみ、片手で果



片手でクルミを押さえ口にくわえる

実を支えながら房から1個のクルミをくわえ、いつもの食事場に移動します。クルミを囓り終えるまで10分ほど。リスが食事を終え森に帰るまで、身動きせず静かに二人で観察しました。

この夏、疑問のすべてを解くことはできませんでした。しかし3頭のリスを引き寄せている一本の若いクルミの木は、大学のキャンパスで大切に育てているクルミにいつの日かリスがやってきてくれることを夢みる私たちに、具体的なかたちと希望を与えてくれました。

森歩きの野帳から

第3回 リスとの出会い

朝、大桑でリスと会う。尻尾を振りながら、身体を幹にこすりつけていた。(2011.02.09)

森

を歩き始めてそろそろ一年を迎える。

森歩きのことを振り返るには、森を歩きながらもつともよい方法だと思い、2月からはこれまでの出会いを振り返るように歩いた。そのなかで、リスとの出会いが僕のかに鮮明に残っていることに気づいた。

カサカサッ。12月23日、大桑から矢糸沢フィールドに抜けるアカマツ林で、なにかが落ち葉を踏む音を聞いた。軽い音だから大きな動物ではないだろうと、アカマツの影に身を隠し、じつと待つてみることにした。

カサッ…カサカサッ、…カサカサッ。進んでは止まることを繰り返しながらも、少しずつこちらに向かってくる。落ち葉が奏でる森の足音は、出会いの瞬間までのたのしみを演出してくれる。エナガやシジュウカラ、ヤマガラが鳴き交わす声も混じって心地よい。

たとえ姿をみることができなくても、音が心を満たしてくれる時間だ。

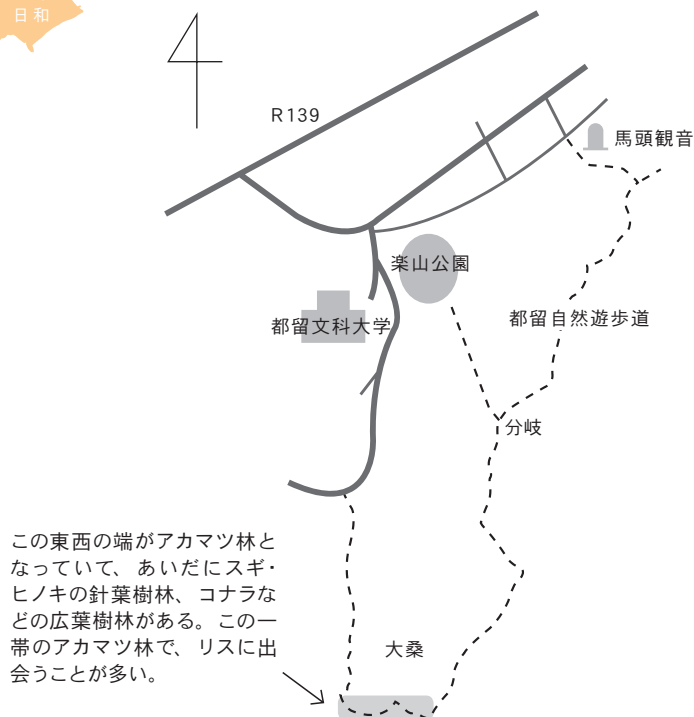
5分くらい待っただろうか。20mほど先の林床を茶色く小さいものが横切った。アカマツの影から身を乗り出し姿を追う。リスだ。ときどき止まっては首を伸ばし、周囲に気を配るような仕草をする。これがあの「足音」の正体だったのだ。

リスと言えば、ほとんど垂直な幹を上へ下へと自在に駆ける。僕はそれが不思議で仕方なくて、ずっと手足がどうなっているのか気になっていた。その疑問を胸に森を歩き続けた結果、願いに答える出会いが1月6日にあった。

僕がテンの糞を見つけて、採取しようかとしやがんだときのこと。すぐそばのアカマツからリスが降りてきた。目と鼻の先とはこの



スギの根元に残ったリスのものと思われる足跡 (2011.02.13)



この東西の端がアカマツ林となっていて、あいだにスギ・ヒノキの針葉樹林、コナラなどの広葉樹林がある。この一帯のアカマツ林で、リスに出会うことが多い。

ことで、手を伸ばせば触れることができるような距離にリスがいる。

とつさにリスは脇にあつたウリカエデに跳び登った。まだ若く細いウリカエデはリスの重みでも、ぐんとたわむ。リスはそれを待つていたかのように、またアカマツに跳び移り、一気に樹上まで駆け上がった。枝伝いに森の奥へと移動していく。50mほど先でまた下に降りてきて、今度は地面を駆けて、スギ・ヒノキの林のなかに消えていった。

僕はこのとき、無意識にリスの手足をみていた。5本に分かれた指に黒く鋭い爪(※)。その手足で、樹皮の割れ目や裂け目を掴んでいるようにみえた。

ツキノワグマやテン、イタチなども木を登るけれど、リスは彼らにくらべて長い指をしている印象を受けた。誤解を恐れず言えば、鳥類に近いような指の長さをもっている。

リスと似た生活を送る、ムササビの手足はどうなっているのだろうか。そんな疑問が新たに生まれる。僕の森歩きは、彼らを目の前にして、あふれる不思議と向き合う「たのしみ」に満ちている。

歩くことで出会い、観ることで知り、聴くことでたのしむ。リスとの出会いは、この一年の森歩きのたのしみを代弁してくれている。今となつては、リスに挨拶にいくような気持ちで森へかよっている。

くりかえし足を運ぶうちに、ふとした瞬間にも「森」の情景を思い浮かべるようになった。そこには、森を歩き始めるときの「どこに、どんな生きものがあるのか」という疑問への答えが、少しばかり含まれている。

春の山でひっそり花をつけるイカリソウ。夏のクモの巣をかくぐつた先にあるオトシブミの揺籃(ようらん)秋にクルミの実を運ぶリスの姿。冬、落ち葉の上を跳ね歩くツグミ。

自分のなかに、一年分の「森の生きもの地図」ができていく。歩きながら、出会いの地図をつくってきたのである。

一年前は、森の情景を思い浮かべることができなかった。どんな草木が生え、どんな動物が暮らしているのかを知らないから、思い浮かべようにも、ただの想像にしかならなかったのだ。

けれど今は違う。出会いの数だけ、彼らの姿を、たしかに思い浮かべることができる。僕はようやく、この場所をフィールドと呼ぶだけの経験が積めてきたのだろう。

何度も足を運んでこそみえるもの、変化がある。捉えられる世界が、確実に広がっていく。森歩きをとおして、僕は足繁くかよう「フィールド」の意味を学ぶことができた気がした。

※のちに確認すると、リスの指は前足が4本、後ろ足が5本。正確には前足も5本だが、第一指(親指にあたる)がほとんどないため4本とした。

西丸堯宏(社会学科4年) 文・写真

あったかい場所

— 泰安温泉 —

富士急行線 谷村町駅から4分ほど歩いたところに、一軒の銭湯がある。百年近い歴史をもつ老舗、泰安温泉だ。ここでは銭湯を経営するかたわら、2階に学生向けの下宿アパートも営んでいる。少し変わったお風呂屋さんだな、という印象をもっていた私は、ぜひお話を聞きたいと思い泰安温泉を訪ねることにした。



泰安温泉の外観 2010年10月29日撮影

朝

夕肌寒くなり始めた10月末、都留市谷村に店を構える泰安温泉を訪ねた。店内には多くのお客さんが来店し、とてもにぎやかな雰囲気があったよっていた。

お話をうかがったのは古屋雄子さん(68)。忙しい月末にもかかわらず快くお話ししてくださった。古屋さんは都留市出身で、この銭湯に嫁いで46年になる。長年ご家族と一緒にお店を切り盛りしてきた。そのあいだに銭湯を取りまく状況はだいぶ変わってきているようだ。

古屋さんがお嫁に来たころ、都留市内には泰安温泉(当時は泰安湯)を含め4軒の銭湯が営業していた。お風呂がまだ一般家庭に普及しておらず、近

所の人たちは街の銭湯を利用することが多かった。通ってくる学生も大勢いて、毎日とても忙しかったそうだ。現在ではほとんどの家庭にお風呂が普及し、昔ながらの銭湯は泰安温泉だけになってしまった。



銭湯を経営していて一番大変なこととは何ですか? という質問に「とにかく休みがないことね」と答える古屋さん。銭湯は休みが少ない仕事なのだという。定休日は毎月第一・三曜日の二日だけだ。

「具合が悪くても休んでられないから、病院に行きながらでもお店を開けなきゃ。臨時休業なんてボイラーの調子が悪いときでもなければありませんよ」。毎日の忙しさを語るなかに、どこか力強さを感じるお話だった。

泰安温泉には毎日いろいろなお客さんが入浴にやって来る。農作業や雪かきの後に体を温めに来るお年寄り、仕事帰りに汗を流していく勤め人。部活帰りの学生は、大きなお風呂のほう

が疲れも取れるからといって通ってくるそう。また、上野原市や大月市など都留市外からのお客さんも多い。古屋さんの「休んでられない」というお話の裏には、こうして毎日のように通ってきてくれる「常連さん」の存在があるのだろう。

「どのお風呂に行くより、ここが落ち着く。そう言ってもらえる時が一番嬉しいですね」。

一回限りではなく頻繁に訪れるお客さんが多いからこそ、古屋さんは「できることは何でもする」という気配りを大切にしてきた。それは顔なじみだからといって欠かすことのな



開店直前の浴場
暖かい湯気につつまれていた



お客さんと談笑する古屋雄子さん（右）
この日も朝早くからたくさんのお客さんが来店していた

い、お客さんへの真摯な態度なのだと思います。泰安温泉に広がる人の繋がりは、きつとこうした気配りに支えられながら生まれてくるのだろう。

◇

下宿アパートを始めたのは30年くらい前のこと。ほかの銭湯は2階に喫茶店などを増設して経営を始めていた。だが喫茶店などは維持していくにもかなりの費用がかかってしまう。そこで、都留には学生が多く集まることを考え、下宿用の部屋を作ることになった。

七畳半から八畳の広々とした部屋は当時とても珍しく、銭湯にはいつでも入れるということ人で人気を集めた。現在は9部屋を貸していて、いまだに空きができたことがないという。

「みんなとつても仲がいいですよ。いまそういうところ、少ないんじゃないの」と古屋

さん。同じ学年はもちろん、先輩が後輩の面倒を見る思いやりの関係が長年に渡って続いてきている。引越したくなれば総出で荷物運びを手伝ってくれという。今年の春も、進んで作業を手伝ってくれた上級生の姿に、古屋さんは心を動かされたと話す。

「毎日会うから家族も同じね。できることは何でもしてあげてますよ」。

ここにも古屋さんの気配りが活きている。いつも常連さんを大切にしているように、学生を家族のように思っている。かけているのだ。「できることは何でもしてあげたい」という思いからは、古屋さんの人柄が伝わってくるようだ。でも余計な干渉はしない。そつと見守り、それとなく声をかけることも学生への気配りのひとつなのだろう。

そうして古屋さんと学生との関係は、大学卒業後もずっと続いていく。もう何年も行き会わないけれど、手紙や年賀状のやり取りが続いている。なかには遠いところから会いに来てくれる人もいるそうだ。

再会るときは結婚の報告や、子ども



下宿のようす
共同のトイレや洗濯機も同じ2階にある

の誕生といたためたい知らせがお土産ということも。一緒に嬉しいことや喜ばしいこと、ときには不安な気持ちも分かち合う関係は、ほんとうに家族のようだ。

* * *

泰安温泉は地域の人たちにとって憩いの場所であり、学生にとっては帰る場所、帰る家でもある。きつとここには古屋さんが大切にしている思いや、たくさんさんの人の繋がりが折り重なっている。そこからは温もりが生まれ、泰安温泉がとてもしあかい場所になっているような気がした。

牛丸景太（国文学科1年） 文・写真

自分をみつめる

香りのアトリエ「紗泡」

ちょっとした幸せで毎日をもっと楽しくなる。私にとってそれはハーブティーを飲んでほっとする時間。おいしく飲みたい、と探していたところ偶然インターネットで見つけた「香りのアトリエ『紗泡』」。ハーブティーにアロマ、石けんなど幅広い体験のできる「紗泡」に惹かれ、主宰者の杉本がおるさんに会いに行くことにした。



優しい笑顔が印象的な杉本さん。ハーブティーを入れてくれた

1月22日、都留市四日市場にある「香りのアトリエ『紗泡』」をたずねた。県立桂高校の近くということだったが、場所がわからず、電話で教えてもらいながらたどり着いたのは、住宅街にある素敵な一軒家だった。笑顔で迎え入れてくださった杉本さん。とても優しそうで初取材で張り詰めていた緊張の糸が少しゆるんだ。

「紗泡」は杉本さんの自宅の一室で開かれている。杉本さんは「私の実験室でもある」という。机には今作ったばかりだというピンクとオレンジの2つの石けんがあり、となりの棚には乾燥したハーブが瓶詰めされてきれいに並べられていた。どこを見てもかわいらしく、アロマや石けんの優しい甘さで満たされている。

杉本さんは東京都町田市の出身で、結婚して都留に引っ越してこられた。引っ越してきた当時、近所でアロマ教室を営んでいた女性と一緒に、アロマと石けんのワークショップを企画していたことが「紗泡」を開くきっかけになったそうだ。現在でも年間を通して石けんづくりの教室や、アロマセラピーの講座などさまざまな企画を主催している。しかし、

すべてが順調にいったわけではなく、「紗泡」を始めたばかりのころは、なかなか地域の人たちにも受け入れられなかったという。

手づくり石けんといえば廃油でつくるイメージが強く、なんとなく品質が悪そうと敬遠されていた。そこで、地域の人たちに手作り石けんの良さを知ってもらおうと、講座や教室を開いて、じっさいにつくって体験してもらうことを通して徐々に理解されていった。理解を得るまでには会場を探したり、さまざまな企画をしたりと苦しいことが多かったと杉本さんは語る。講座や教室を重ねていくうちに、とくに主婦の人たちに受け入れられ、地域に根づいてきた。

今も続けられている手づくり石けん教室などは、「それをきっかけになにか自分の体調とかで困ったことがあったら（「紗泡」を）思い出してくれれば」という杉本さんの思いから開かれている。教室に参加した人たちが自分でつくった物



お友達に描いてもらったという木の板でつくられた「紗泡」の表札



カラーセラピーで使う色のサンプル。赤、青、オレンジ、透明、ピンクなどさまざまな色が並ぶ。これを見て、気になった色で自分の今の気持ちがわかるという

を自宅ですべて良さを発見し「紗泡」にやってくることもよくあるという。既製品ではない、自分でつくる良さ、効果を実感できるいいものを知ってほしい、という杉本さんの気持ちが伝わってくるようで、ますます「紗泡」に惹かれていった。

「紗泡」のコンセプト

活動するにあたっていつも考えていることを教えてくださった。

『人に依存するのではなく見る目を養うこと』
カラーセラピーやハーブティーレッスンはトレーニングなのだという。最終的には自分の見る目を養って、似合う色、そのときの気分にあう香りを選ぶこと。自分を見つめて自分の心を気遣ってあげること。それを手伝うための場所が「紗泡」なのだ。「トータルできれいになれる秘訣はいっぱいあるんだよ、つて伝えたい」と杉本さん。ハーブティーもアロマも、私にとって時間があるときにしかできない贅沢だが、杉本さんはその色や香りの力を理解し、日常にとりいれている。お話を伺って、私は新しい生活のかたちを発見した。それは、今は特別なものが、使い続けることで、いつのまにか生活の一部になっていくということだ。私もその過程を味わってみたい。

ハーブティーレッスン

マロウブルーというハーブを知っているだろうか。それだけだときれいなクリアブルーのお茶なのだが、そこにレモンの汁を加えると、さあつと透き通ったピンク色に変わる。こうして見た目で楽しめるのもハーブティーのおもしろさ。でも、市販のものは多すぎて飽きてしまうし、自分で入れると何だかおもしろくない。そんなとき出会った「紗泡」。せっかくなので、ハーブティーレッスンを受けた。おいしいハーブティーを飲むためには好みでブレンドするのがいい。「単品の味がわかればうまくブレンドできるようになる」ということで、それぞれを一つずつ味見させてもらった。一般に売られていて赤い色が特徴のローズヒップティー。しかしそれはよく一緒にブレンドされるハイビスカスが出す色なのだ。今までのローズヒップティーは赤い、という固定概念が覆された。それぞれ単品で飲んでみると、本来の味がどういふものなのかがよくわかる。杉本さんは残ったハーブティーはその日のうちであれば化粧水にも使えると教えてくれた。自然のものだから、安心して使える無添加の化粧水になる。飲む以外の利用法があるとは、とても新鮮な発想だ。



香りのアトリエ「紗泡」

open; 10:00-17:00

(木・金は 19:00 終了)

完全予約制・不定休

URL; <http://saposoap.web.fc2.com/index.html>

小佐野めぐみ (国文学科3年) 文・写真

ハーブティーは味覚だけでなく嗅覚でも味わっているという。人工的ではない自然の植物の香りだから、少し草っぽいけれどその香りが本物なのだ。その香りを一つずつ自分のなかにたくわえていけば、見えていなかったものが見えるようになると思う。それが「紗泡」のコンセプトの「見る目を養うこと」のひとつであるような気がする。

本物を知ること、感じることで自分の感性を育てていきたい。杉本さんのお宅では朝、お茶のパックにブレンドしておいたハーブティーを入れて飲むそう。素敵な暮らしからだ。「紗泡」でハーブを手に入れてから、私も毎日好きなものをブレンドしている。同じブレンドでも分量によって味がまったく違い、毎日飲むのが楽しみだ。今度は自分でハーブを育ててみたくなった。自分でつくることがまた新しい発見があるかもしれない。

先生を訪ねる

第2回 自然塾の番長

先生をめぐる都留の旅。

今回の先生は、「宝の山ふれあいの里ネイチャーセンター」の学芸員である佐藤洋さん（36）。

みずからを「番長」と名乗り、ネイチャーセンターを訪れる人にいろいろな体験を通して自然とのふれあい方を伝えている。過去に何度か寄稿をしてくださるなど、本誌との関わりも深い。

1月29日、佐藤さんが携わる活動の一つである「自然塾」に招いていただいた。

大澤かおり（社会学科2年） 文・写真

自転車を押しながら雪の残る長い坂道をとぼつていき、ようやくネイチャーセンターにたどり着く。大学から2時間ほどの道のりだった。時刻は午前9時。そこには、防寒着に身を包んだ子どもたちの姿が。送迎の車から飛び出した子どもがまず最初に駆け寄るのは佐藤さんのところだ。

「番長、おはよう」

子どもたちは口ぐちに挨拶をして佐藤さんを取り囲む。ちよつと強面の佐藤さん。けれどそれを意識させないほど、子どもたちに向けて笑顔は明るい。

この自然塾は、都留市の社会教育事業の一つで、市内の小学4年生から中学3年生を対象として、一年を通して自然のなかで体験をするというものだ。今年で13年目を迎えるが、いまだ人が途切れることはなく、定員を大幅に超える希望者が集まるという。

子どもたちは散りぢりになつて好きなことをやり始める。焚き火の周りにいる子や、山へ走っていく子。犬と遊ぶ子もいれば、遊具で遊ぶ子もいる。皆、てんでばらばらだ。佐藤さんに今日の予定を尋ねると「未定です」と力強く言われてしまった。一から十まで決められたなかで活動をおこなうのではつまら

ない、というのが自然塾を始めた当初からの佐藤さんの姿勢だ。これをやつてはいけない、というルールもこの自然塾にはない。

「外から見るとまとまりがないと思います。じつさい、ケンカもするしものも壊れるし、怪我也する。でも、そういつたときのリスク・マネジメントもきちんとするつていうのは徹底してます」

薪割り体験

午後になると薪割りをした。まずは佐藤さんが材木の1つを目の前に置いて、斧を振り下ろす。男の子たちは佐藤さんが軽々と材木を割っていくのを見て、我も我もと斧を手にとる。けれど、いくら斧を振り下ろしても佐藤さんのようには割れないのだ。私も挑戦してみたものの、材木の表面に傷が増えていくだけでなかなか上手くない。

「足を横に開いて、真上から力がかかるように振り下ろすんだよ」

佐藤さんの言葉を受けてできるかぎりその通りにしてみる。斧が木目の間にすんと収まるように、きれいに割れた。これは気持ちいい。

そのうちに1人、2人とコツを掴んでいく。



すると遠巻きに見ていた女の子たちも、薪割りの列に並ぶようになっていった。できないよ、と呟いていた子が自分の力で材木を2つにした瞬間の笑顔を見ると、こちらまで「やった!」と叫びそうになる。1時間後には、斧を持つのも初めてだった子どもたちが器用に薪を割れるようになっていた。

「子どもはこういうの、すぐ覚えるよ。大人のほうがあんなにこうだって言って考えちゃって上手くない」

なかには、アカマツのように木目のねじれた木を上手く割るために、どこから斧を入れたらいいか、木目をじつと見つめて考え始める子もいた。何か一つできるようになることで、新しいたのしみ方が生まれるのかもしれない。

夜の山にて

冬至を過ぎてだんだんと日が長くなつてきている、と言っても、もう午後6時ごろには辺りは真つ暗になる。ナイトハイクが始まった。はぐれないように、2、3人で手をつなぎながら、坂道を歩いていく。途中で林に分け入って、佐藤さんの指示で一人ひとり分かれて林のなかに寝転ぶことになった。私も少

し歩いた先の斜面で大の字になる。佐藤さんは「10分だけ何もしゃべらないように!」と言った。静かな夜の山のなかで、ただ何もせずじつとする。ふだんの生活ではなかなか体験しないことだ。暗闇に体を横たえて、子どもたちは何を感じているのだろう。

小屋に戻り薪ストーブを囲みながら、佐藤さんがナイトハイクの感想を尋ねる。「星がきれいだった」、「寒かった」。子どもたちの言葉に、佐藤さんは聞き入っている。ときに「いいね!」「そうだよ」などと相槌(あいづち)をうちながら。

すべての活動を終えたのは午後7時。帰りに、佐藤さんに「お疲れ様でした!」と言われて、ふとそんなに疲れてはいないな、と思った。一日中動き回っていたせいで、体には疲れがたまっているのだろう。けれど、何故だか疲れたという気はしない。うきうきした気持ちだが、焚き火の燃えさしのようにまだ残っているようだった。

「番長」の頭のなか

「番長」というインパクトのある呼び名はどこから来たのだろう。佐藤さんの思う「番長」のイメージをうかがった。



皆で薪割りに挑戦

「ガキ大将のイメージですね。安心感っていうか、自分を見守ってくれて、何かあったときには絶対的な力を発揮してくれるような」そのうえで、自然塾や佐藤さん自身は子どもたちを受け入れる存在でありたいと言う。

自然塾では佐藤さんが一方的に活動内容を決定することはない。学校とは違った学び方をしてほしい、というのが佐藤さんの願いだ。決められたプログラムのなかで動くのではなく、子どもたちがそのとき見ている方向を重視して活動をする。けれど、そういった学び方には時間がかかる。自然塾では通常の一年ごとの参加者の募集に加えて、二年目も継続

して参加できる「15人枠」を導入している。

子どもたちが自分たちの力でやり遂げるためには、あえて黙っていないくはないけれどもある。「だいたい10のうち0から2くらいのことだけは教えよう。で、後は黙ってようって心がけてます」こういったスタンスは、佐藤さんの子ども時代に

原点がある。佐藤さんの父親の教育方針は、「何でもやっていい、でも最後まで自分でやれ」。この考え方のなかで育っていくうちに、自分の力でやり遂げることの大切さが、佐藤さんの心に強く刻まれるようになったのではないだろうか。

いつも梓にはまらない自由な発想をする佐藤さん。夢はありますか？ と聞くと、自然塾から発展した形で寄宿舎を作りたいという。自分たちで生活しながら、毎日自然に触れて、ときにはケンカもして、経験と知恵を身につけていける場所。話を聞きながら想像してみる。自然塾でのにぎやかな雰囲気そのままに、子どもたちが大勢でご飯を食べたりお風呂に入ったりのだ。佐藤さんの頭のなかは、どうしたらもつと自分が、そして皆がたのしくなるか、というアイディアでいっぱいなのだ。

向き合うということ

自然塾には、引き込まれずにはいられない不思議な魅力がある。最初は取材という名目のはずだったのに、いつの間にか私自身が自然に触れて、驚き、考えて、笑う、参加者の一人になっていた。自然塾の居心地がいいの

は、自分の思いを肯定してくれる場所だからだと思う。自分のやりたいことをできる場所があつて、自分の感動に共感してくれる仲間や佐藤さんがいる。そのなかで培われる自信が、また新しいことへ挑戦する原動力になるのだろう。

佐藤さんは、私に子どもと向き合ううえで一つのかたちを示してくれた。私はこれまで小さい子どもに接するとき、心配する気持ちが強くなるあまり、子どものやりたいことを制限してしまっていたように感じる。けれど、一歩近づいて子どもの声に耳を傾けてみると、大人の立場だけでは見えなかったことに気づく。子どものなかにある「知りたい、やってみたい」という気持ち。それを引き出してあげること、子どもは大人が想像するよりもずっと大きく成長していくはずだ。

子どもと大人の関係ばかりでなく、立場や考えの違う人と接する機会は数多くある。人と向き合うことは、自分の目線を相手の目線に合わせることで。そうして、相手の見ている世界を推し量ることができれば、相手を尊重する気持ちが生まれてくる。佐藤さんと子どもたちとの関係は、私の人との関わり方を足元から見つめ直すきっかけになった。

ヒミズを見る

『野ネズミの森』（今泉吉晴、フレーベル館）に紹介されていた、ヒミズと出会う方法。ガラス板を地面に置くことで、彼らの姿を間近に見ることができるならば、とさっそく試してみました。モグラの仲間であるヒミズは落ち葉や倒木の下を掘り進むといひます。彼らが暮らしている場所は意外と近くにありそうです。

狩野慶（ゆずりはら青少年自然の里）＝文・写真



になくなっていました。

3月30日、じつさいにガラス板を置いてみます。丸太の下に差し込むように置くと、数日後、丸太の下から続く溝がガラス板の下へと進んでいました。曲がりくねったり、Y字に分かれたり。ガラス板の下にあらかじめ置いたヒマワリの種に誘われるように、その溝は日ごとに伸びていきます。

ビデオカメラを設置して撮影してみると、しっかりとヒミズの姿が映されていました。長く伸びた鼻をひくひくさせながら、少しずつ、しかし進むときはすばやく、前へ進んでいきます。ヒマワリの種をくわえると、急いで丸太の下へ。ガラス板の上の落ち葉が風で転がったときも、その瞬間に急いで丸太の下へ戻っていきました。ガラス

の下を進むことはヒミズにとって冒険であり、丸太の下は安心できる特別な場所のように見えました。

黒い毛で覆われた真つ黒な顔に、細長い鼻。毛がまばらに生えた長いシッポ。なぜこのような姿をしているのだ

ろう、と不思議に思います。

もっと近くでその姿を見るために少し工夫をしてみます。直径3cmのアクリルパイプをガラス板の下に斜めに差し込みます。片方に直径7cmほどのフタ付きの丸いケースをとりつけて、そのなかにヒマワリの種を置きました。パイプを通して、地上に置かれたケースのなかの種を食べるヒミズの姿を、横から近距離で見ることができるようになりました。

からだを左右に小刻みに動かしながら、ヒミズはパイプのなかを勢いよくのぼってきます。パイプから顔だけのぞかせて、近くにあるヒマワリの種を鼻でさわり探り当て、口にくわえると、また勢いよくバックして戻っていきま

す。何度かそのような動きを見せたあと、ケースのなかに身を置き、からだを丸めて種を食べるようになりました。

が苦手なようですが、ゾウの鼻と同じような役割を果たすその鼻がヒマワリの種を食べるのに大切な役割を果たしていると感じました。

それでは、身体全体を覆う真つ黒でつややかな毛や、いっぽうで毛がまばらに生えたシッポは彼らの暮らしでどのように役立っているのでしょうか。どんなに細かい特徴であっても、きっとそれぞれに隠された意味があるはず、と今では考えています。それはほかの生きものにも言えそうです。ヒミズとの出会いから、いつそう興味深く、細かく丁寧に、身近な生きものの姿を観察するようになりました。



ケースのなかのヒマワリの種を食べるヒミズ

フィールド暦

7～8月に都留市で見られる生きものを紹介します。ここでは、地域のかたからの情報も掲載していますので、ぜひ、編集部までお寄せください。

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真



セミの鳴き声の初認時期

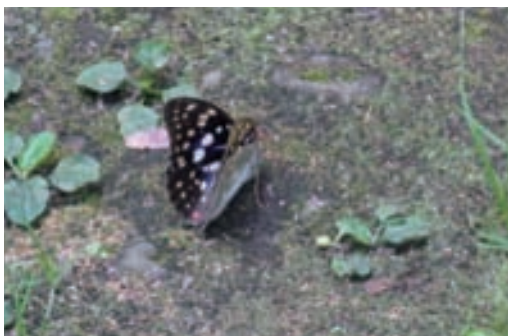
都留市内でのセミの初鳴き情報です

・ニイニイゼミ	7月 5日	都留市田原
・ヒグラシ	7月 8日	都留市十日市場
・アブラゼミ	7月 22日	都留市田原
・ミンミンゼミ	8月 4日	都留市井倉

メジロの巣 2011年7月6日 都留市十日市場
十日市場在住の清水貞一さんに鳥の巣があることを教えてもらい、観察に行きました。すると、ウメノトリにメジロの巣があり、親鳥が抱卵中でした。清水さんによると、7月20日ごろにヒナが巣立ったそうです。



ヒバカリ 2011年7月6日 都留市十日市場
夜、ヒバカリの成蛇（せいだ）を見つけました。おもに早朝や夕方活動するヘビです。



オオムラサキ 2011年7月14日 都留市田原
今年は大学キャンパスでオオムラサキがよく飛んでおり、少なくとも3頭を確認しました。



サワグルミの実 2011年7月17日 都留市鹿留
細長く垂れ下がっているのが、サワグルミの実です。市内では標高600mほどの沢沿いで見られます。



クサギの花 2011年8月4日 都留市井倉
夏に白い花を咲かせます。名前の由来は、葉や枝をちぎったときに臭気（くさき）がすることによります。

センサーカメラが写した動物たち

中屋敷フィールドでは、赤外線センサーカメラを設置して動物の調査をしています。下の写真は、2011年5月～7月に撮影された動物たちです。



キツネ 2011年6月4日
このところ、しばらく確認されていませんでしたが、久しぶりにキツネが写りました。



キクガシラコウモリ 2011年5月3日
キクガシラコウモリはこの洞窟で、年間を通して撮影されています。



ニホンジカ 2011年6月13日
近年、都留市でもニホンジカは増加しているようで、山では声も耳にします。



ハクビシン 2011年6月13日
春から秋にはよく写りますが、冬には生息していないようです。



ニホンザル 2011年7月6日
今年はニホンザルが少なく、群れの数も少ない傾向にあります。



イノシン 2011年6月19日
夏になり、フィールドではイノシンが土を掘った跡をよく見かけます。

FIELD NOTE

特別号

発行人

北垣憲仁〔30-33〕

統括編集者

西教生〔30-33〕

編集長

香西恵〔12-13,26-27〕

牛丸景太〔2-3,30-33,36-37,43-45〕

前澤志依〔1,8-11,14-15,20-21,34-35,48〕

編集

大澤かおり〔4-5,40-42〕

小佐野めぐみ〔38-39〕

崎田史浩〔28-29〕

平井のぞ実〔18-19〕

藤森美紀〔7-6,22-25〕

持田睦乃〔16-17,46-47〕

ロゴデザイン

工藤真純

〔 〕は編集担当ページ

FIELD・NOTE（フィールド・ノート）

発行日：2012年7月21日

発行部数：2000部

発行・編集：

〒402-8555

山梨県都留市田原3-8-1

都留文科大学

コミュニケーションホール地下1階

地域交流研究センター

フィールド・ミュージアム部門

『フィールド・ノート』編集部

E-mail: field-1@tsuru.ac.jp

編集後記

高校生に知ってほしい

都留の良いところ

う称「オレンジロード（オレロ）」……都留文科大学のグラウンド側にある通りの呼び名です。文大生のアパートが多く集合しているエリアで、オレンジロード自体は閑静ですが（特に日中）、長い坂をくだると国道139号線に出て、コンビニエンスストアやファストフード店に辿り着きます。昼食や、テスト勉強中の夜食を求めるのにもうってつけです。また上った先のうぐいすホールからは星がよく見られます。数十年間、学生の往来を見守ってきた「オレロ」はいろんな場所につながっているのです。
（平井のぞ実）

るり色、というのが、どんな色なのかすぐにぱっと浮かぶでしょうか。青と紫のあいだの、藍色に近い深い色です。夕暮れ時、本当に少しの時間だけ、空がきれいなるり色に染まります。地元には真っ赤な夕焼け空が大好きで、都留ではなかなか見られないのを残念に思っていました。でもそのかわりに、今まで気に留めていなかった「夕方と夜のあいだ」の時間と景色を、落ち着いた気持ちで楽しめています。
（持田睦乃）

しずかで心細い夜や困ったことがあったとき、突然でも、家にきていいよと言ってくれる友人が身近にいること。そして歩いていける距離に友人の家があること。東日本大震災のときもサークルの仲間の家に集まって食糧を集め、キャンドルをたいて停電や余震をやり過ごしました。都会ではこんな距離感を実現するのは難しいのだろうなと思いつつ、都留でお互いに頼りあえる友人や仲間に出会えたことに感謝しています。
（藤森美紀）

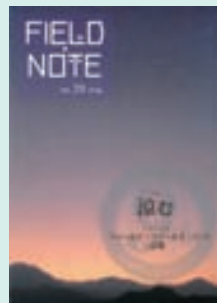
『フィールド・ノート』で、 都留に出会ってませんか？

イラストの植物や動物、昆虫は、どれも都留で会うことができるものです。

『フィールド・ノート』では、都留の身近な生きものや、地域の人々の暮らしに焦点を当てて観察し、記録し、発信しています。

編集部員一人ひとりが丁寧に観察を続け、人とかわり、作りあげているのがこの冊子です。

都留ですごす4年間。あなたも読者として、書き手として、地域の人と自然に出会ってませんか？





FIELD・NOTE

特別号

発行日：2012年7月21日
発行所：〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 都留文科大学 コミュニケーションホール地下1階
地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門 『フィールド・ノート』編集部



野生を育む
Grow Wild
都留文科大学
フィールド・ミュージアム
Decent Wildlife and Our Community